昔物語から探る小国町

舩山　澪　舟山香菜子　小関真奈　齋藤麻未　伊藤悠飛

１．テーマ設定の理由

昨年、先輩達は「小国の昔物語について」というテーマで小国町南部地区に伝わる昔物語を調べリポートにまとめました。私達はまず、それを読み調査内容とその活動の意義を理解することから始めました。そこで教えられた「歴史を伝継することの大切さ」との視点から、足がかりを作ってくれました先輩方の意志を汲み、大テーマを引き継ぎつつ、北部地区を新しく調査の対象に加え、小国町の歴史を探っていきたいと考えました。

図（羽前小国郷の歴史）より

２．調査の概要

（１）羽前小国郷の集落
　　1 集落と大字名
　　2 集落名の由来

（２）昔物語について
　　1 語り部さん
　　2 昔物語収集

（３）北部の街道
　　1 柳生戸街道
　　2 西山街道

（４）物資の輸送
　　1 陸の輸送
　　2 川の輸送

（５）かるた制作
　　1 制作にあたり
　　2 かるたを作る

３．調査の結果

（１）羽前小国郷の集落

1 集落と大字名

北部地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
徳網	とくあみ	五味沢	中里	なかざと	舟渡	松崎	まつさき	松崎
樋倉	ひぐら	五味沢	上平	うわだいら	舟渡	尻無沢	しりなしざわ	尻無沢
五味沢	ごみさわ	五味沢	入山	いりやま	舟渡	網代瀬	あじろせ	網代瀬
出戸	でと	五味沢	蟹沢	かにさわ	舟渡	入折戸	いりおりと	入折戸
石滝	いしだき	石滝	宮ノ崎	みやのさき	舟渡	樋ノ沢	ひのさわ	樋ノ沢
中野	なかの	石滝	窪	くぼ	舟渡	中島	なかじま	中島
栃倉	とちぐら	栃倉	焼山	やけやま	焼山	長沢	ながさわ	長沢
驚	おどろく	驚	荒沢	あらさわ	荒沢	小股	おまた	小股
越中里	えっちゅうざと	越中里	折戸	おりと	折戸	太鼓沢	たいこさわ	太鼓沢
今市	いまいち	今市						

本町地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
金目	かなめ	金目	若山	わかやま	若山	大宮	おおみや	大宮
開拓	かいたく	吉田・金目	舘	たて	若山	湯ノ花	ゆのはな	湯ノ花
長萩	ちょうはぎ	古田	舟場	ふなば	増岡	北	きた	北
古田	ふるた	古田	団子山	だんごやま	増岡	二本柳	にほんやなぎ	北
小渡	おど	小渡	下林	したばやし	増岡	高稲場	たかいなば	西
玉川口	たまがわぐち	小渡	横道	よこみち	増岡	田沢頭	たざわがしら	田沢頭
越戸	こえと	小渡	増岡	ますおか	増岡	新屋敷	しんやしき	新屋敷
貝少	かいしょう	貝少	沖	ますおか	増岡	針生	はりう	針生
片岩	かたいわ	小国小坂町	小芦	こあし	小国町	町原	しんばら	町原
腰巻	こしまき	小国小坂町	緑町	みどりちょう	緑町	木落	きおとし	町原
小坂町	こさかまち	小国小坂町	栄町	さかえまち	栄町	杉沢	すぎざわ	杉沢
小国町	おぐにまち	小国町	岩井沢	いわいさわ	岩井沢	新原	しんばら	新原
大滝	おおたき	大滝	朝篠	あさしの	朝篠	請向	うけむかい	伊佐領
小倉	こぐら	小倉	水沢	みずさわ	朝篠	伊佐領	いさりょう	伊佐領
種沢	たねざわ	種沢	大石	おおいし	伊佐領	古屋敷	ふるやしき	綱木箱ノ口
松岡	まつおか	松岡	向大石	むかいおおいし	伊佐領	箱ノ口	はこのくち	綱木箱ノ口
黒沢	くろさわ	黒沢	蠑池	いもりいけ	伊佐領	高坂	たかさか	綱木箱ノ口
綱木	つなき	綱木箱ノ口						

南部地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
下新田	しもしんでん	玉川	泉岡	いずみおか	泉岡	滝倉	たきぐら	滝倉
玉川新田	たまがわしんでん	玉川	古屋敷	ふるやしき	小玉川	菅沼	すがぬま	菅沼
玉川	たまがわ	玉川	長者原	ちょうじゃはら	小玉川	足野水中里	あしのみずなかざと	足野水中里
片貝	かたかい	片貝	川入	かわいり	小玉川	百子沢	ひゃっこさわ	百子沢
向片貝	むかいかたかい	片貝	六斗沢	ろくとざわ	小玉川	北山	きたやま	百子沢
中田山崎	なかたやまざき	中田山崎	小玉川	こたまがわ	小玉川	市野沢	いちのさわ	市野沢
山崎	やまざき	中田山崎	樽口	たるくち	樽口	足野水	あしのみず	足野水
玉川中里	たまがわなかざと	玉川中里						

津川地区

集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名	集落名	よみ	大字名
木ノ谷	きのだに	市野々	西滝	にしだき	西滝	高松	たかまつ	白子沢
市野々	いちのの	市野々	大石沢	おおいしだ	大石沢	森残	もりのこし	白子沢
叶水	かのみず	叶水	胡桃平	くるみだいら	大石沢	沼沢	ぬまざわ	沼沢
才ノ神	さいのかみ	叶水	高野	こうや	大石沢	百子沢	ひゃっこざわ	沼沢
土尾	つちお	叶水	赤沢	あかさわ	大石沢	明沢	みょうざわ	沼沢
二渡戸	ふたつど	叶水	豆納	ずのう	大石沢	遅ノ越	おそのごえ	沼沢
山崎	やまざき	叶水	桜	さくら	白子沢	間瀬	まぜ	沼沢
新股	あらまた	新股	沢中	さわなか	白子沢	綱川	つながわ	沼沢
河原角	かわらずの	河原角	白子沢	しらこざわ	白子沢	屋敷	やしき	沼沢
東滝	ひがしだき	東滝						

2 集落名の由来

小国町北部地区の主な集落名の由来。（昔物語として残っているものについては後に記述）

栃倉	白山姫神社の境内に、根元から二股の栃の大木が生い茂り、その面積３反歩に広がったという。栃の木の実から蔵でも建て豊かな村があったのか栃蔵という地名であったのが現在の栃倉に変わったのではないかとの集落のお年寄りの話である。今なお栃の木の株元があるそうです。
尻無沢	集落の中心部に西の山合から小沢が流れ出しているが、当集落が出来始めた頃は沢の出口付近一帯が芦の湿原で、沢の行き先が確認されなかったために、「しりのないさわ」ということで、尻無沢と呼ばれるようになったと伝えられている。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員長　栗田寛美氏）より
網代瀬	集落の古老に聞いても、地名の由来については不明であるが網代（あじろ）というのは川の瀬に、竹で編んだ網を仕掛け魚を獲る漁のことをいい、この地区の人々は昔、その漁を業いとしていたことが推察できる。また、この地区は昭和の初め頃まで、荒川を渡し舟で渡り、川向いの若山地区と行き来していたそうである。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員長　栗田寛美氏）より
舟渡	承久の変（西暦１２２１年）によって、佐渡に移された順徳上皇がひそかに彼の地を脱出し、越後より荒川沿いに上り、当時の通路である八ツ口・越戸を通り、沖庭峠を越えて小渡に至り、さらに舟渡・越中里をすぎ朝日岳を越えて、村山方面に出られた。そして、北村山郡の御所山に行かれたと伝えられている。その時、上皇が荒川を渡渉（お渡り）せられたことにちなんで小渡（元、御渡と書いたという）の地名が生まれ「舟でお渡り」なされたことから舟渡地名が生まれたといわれる。 （小国町史　順徳天皇に関する伝説）より 上皇が通ったといわれる裏づけとして、上皇は観音様と天神様をご信仰されており、お供の者に２つのご神体を持たせてこられたが、いずれも小国で紛失された。その１つが針生吉祥寺の長田の観音様（聖観音で小渡地内長田という田の中から発見されたもの）であり、他の１つは越中里の蕗（ふき）の葉の葉天神（蕗の下より発見されたという金刻の神像）であるといわれている　（小国伝説集）より
貝少	その昔、貝少地区は水が冷たく、つぶや、たにし等の貝類が良く育たなかったという。また海の貝類の化石が少なかったことから名前がついたものと思われる。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　木村俊三氏）より
舘	字の如く「やかた」と称されるが、大昔に、城とまではいかない舘があり、高貴な人が住んでいたのではないかと、古くからいい伝えられてきた。地形的にも、人の住む場所としては、住みやすい場所であったに違いない。周囲から、石器、土器などが多数発見されていることから、考古学的にも間違いのない、生活の場であったと思われる。集落の歴史として推定されるのは、最も古い家で６代目くらいであるから、およそ２００年～５００年と思われる。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　舟山数夫氏）より
新屋敷	昔、河原だった所を新しく耕して集落をつくった所なので、新屋敷（しんやしき）といわれている。当時は２０戸程あったといわれる。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　和田一枝氏）より
壁田	昔々、赤茶色の粘土質の土地があり、付近の人々は、家を建てるときの壁材料として、その赤茶色の粘土を使用していた。どの壁土の採取地でもあったし、田も畑も一帯が粘土質の地形であった。その土地柄から壁田の地名が俗称となり、後に地名になったといわれている。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　金　正美氏）より
小渡	順徳天皇が沖庭峠を越えて、荒川をお渡りになったと伝えられており、それにちなんで御度（おど）といったのが、後に小渡となったといわれている。 （ふるさと学習資料委員会　編集委員　金　正美氏）より
越中里	昔、人々の一つの集団が小国町に住んでおり、その人々が今の生活よりもっとよい生活環況があるかも知れないと思い集団移住することにしました。そしてその人々は現在北部といわれている所によい場所はないかと求めていき、美しい山々を眺めたり、山菜をとったり清き荒川のせせらぎを聞きながら北上していくと、とてもながめのよい所に出ました。そこは荒川の対岸で魚は豊富にすみ、山は近く、生活する場所としては申し分なく、荒川の真中には中州（中島）があり、それを越えて対岸に渡りつき、この土地に自分達が住むことを決めました。荒川の中島を越えて、新しい土地を求めたというところから「越中里」といわれるようになった。　（小国郷の伝説集）より

（2）昔物語について

1　語り部さん

・ 後藤弘子氏（小国町の語り部）に語りを披露していただきました。

話「小国郷長者原　とよゐのむかしかたり」より

きつねのほうしょうの玉
昔あったけど。やれ昔、越後の安田ていう所に「せんにむ」という家あったけど。じいと、ばばの二人暮らしであったど。 ある日、爺は山さ木切りにいって、昼飯食って一服していたば向うの方から、きつね何か白い物くわい【咥えて】でくるから、じさ【爺】は木の陰さ隠れて待っていたどやれ。じさの前さ来た頃、「やあっ」といってじさとび出はった【飛び出た】じもの。そうしっど【そうすると】、きつねのちくしょうたまげて、【小狐は驚いて】「くわぇーん」と一声吼えて、とび上がったど。その時、きつねは、口さくわえっだ物おどして【咥えていたものを落として】、一目散に山さにげで【逃げて】いってしまったどやれ。 じさ、その白い物拾ってみだば、何だが毛のかたまりのような物だじもの。 「これこそきつねのほうしょう玉だなあ・・・」 と思って家さ持って来て、ばばと二人で、誰にも見せないで、しまっておいだど。 きつねの方では、大事な玉をなくして、人をだます事もできなくなってしまって困ったじもの。うまいあんばいにばけらんなくて【上手に化けることが出来ずに】、どうしたらいいがど、二、三日考えだど。そのうちに考えついだじもの。じさの娘に子供生まれる事さ気づいたきつねは、村の若いもんにばけて安田の家さ来たど。そして若い者の言うには「じさじさ娘子お産始めだど。なかなか難産で、子供もてないがら占ってもらったば、これは、じさの持っているきつねのほうしょうの玉をなめさえすればすぐ子供は生まれるって言わっだがら、はやく、それ持って行ってくれ。じさ足がおそいがら、おれ、それ持って先に行くから、じさ後からゆっくり来いちゃ。」ていうど今まで誰にも見せた事のない、ほうしょうの玉を出してきて、「はやく、はやく、走って行ってくれ。おれど、ばば、ゆっくり行くから。これなめさせたら、おら行くまでに、孫が出ているがら。」と言って、べろりきつねにだまされでしまって、宝物はなしてしまったじもの。じさとばばは、娘の所さ行ったば、たまごに目はな付けたようなめんごい子【かわいい子ども】が生まれたといって、大喜びのところであったど。 「早く、じさだいてみれ」【じいさん抱いてみろ】 っていうがら、じさがら先にだいて、こんどは、ばばにだがせだど。ばばは、 「じさそっくりだ。」って言うじもの。 「いや、いや、この子は、ばばそっくりだ。」 って言って二人でやるから、とるやら【代わる代わる】何べんもしている内に、子どもだち来たじもの。一人の子供は、橋の下をのぞくと、じさとばば二人で、まるこい石をやったりとったり、「じさににた」「いや、ばばににた」と言っていたけど。 あんまり子供にわらわっだば【笑われ】、はっと目がさめたようだけじか、橋の下にいで、石ころ、やったりとったりしていであったど。 「やれやれ、きつねにあだかえされた」【仇をかえされた】

と言って、家さ帰ったば、ほうしょうの玉がながったど・・・。
　きつねのあだがえしって、まことにおそろしい。
　トンピンカラリン虫くった。

　初めてお聞きした本物の【語り】に驚きました。後藤さんの身振り手振りで語られるその話術にとても引き込まれました。特に地元の方言で語られる昔物語はとても身近に感じることが出来て、その言葉はとてもあたたかく、子どもからお年寄りまで、聞くに楽しい話が数多くあり、そこから当時の生活背景も感じる事ができました。また、紙芝居のように作り手の創造する背景が、絵とした情報として入ってこない分、その背景の余白を想像して埋めることができる。そんなことがより心に響くのではないかと思いました。そして、それはフィクションとノンフィクションの境さえあいまいにする作用も秘めているように感じました。この物語の元の話し手であった（故）佐藤とよゐさんは明治３５年生まれで小玉川（南部）育ち。小国町を代表する語り部のお一人でもありました。後藤さんに語りの本を見せていただきましたが、それは出来るだけ生の口調を再現するという意味から文字にすると読みにくい部分もあるそうですが、【語り】に忠実に話し言葉だけの文章になっていました。

小国の語り部、後藤弘子氏の【語り】を聞く

ジェスチャーを交えて語られる【語り】

宝憧院のものとされる木板の写し

「宝憧の玉」から、昔、宝憧院という名の寺があった事実をお聞きし、調べてみるとこんな話しもあったことがわかりました。

宝憧院について（小渡）
小渡集落の下に坊様庭敷と呼ばれる畑があるが、昔ここに宝憧院という寺があった。 ここの和尚は毎朝、貝少川の宝憧院滝（その名は今も残っている）で水垢離をすることを業にしていた。ある朝いつものように水垢離をしていると滝壷の中から河童が出て来て和尚の生き肝を抜こうと肩に手をかけた。すると和尚は河童の手を肩に固く挟み、知らないふりをしてお寺に帰ってしまった。 河童はどうしても逃げることが出来ないのでとうとう和尚に謝った。 そして、今後は決して小渡の子どもをとらないし、また川で命を落とさせるようなことはしないという証文を和尚に渡すことで、河童は川へ帰してもらった。それからというもの、小渡集落は川端にありながら子どもが川で死ぬことはなくなったと云われている。

河童と狐の違いはあるものの、人をだますことに長けている（と云われている）両者は今まで聞いた小国の昔物語にも頻繁に登場しています。

宝憧院はいつ無くなったか明らかではありませんでしたが、不動明王供御礼宝憧院、奉読諦仁王般若経如満足仮と記した木版（２頁右下写真：写し）は存在することがわかりました。

2 昔物語収集

小国町は鶴岡市（庄内）の合併前までは、山形県全市町村内での面積は県内一位でありました。そしてその広大な土地の９割以上を山林地帯が占めているため、自然豊かな環境条件の中で身近にその偉大さに触れることができます。それゆえに昨年のレポートでも紹介した一遍（玉川太郎の投げた石：玉川集落）にも似た自然に関する昔物語も北部地区にはありました。

八幡太郎の投げた石（舟渡）
舟渡集落の方にある、屏風岩山の所に八幡石という（直径６メートル余りもある）大きな石がある。その石は源八幡太郎義家という人が、自分が大力を持っていることを誇って、みんなにこの大力を示そうとこの大石を縄で背負い、舟渡集落から屏風岩山の裏側集落（現在、金丸という集落がこの集落かと思われる。）まで持って行こうとした。そして大きな縄でその石を背負い、ぐんと立って屏風岩山に登り始めた。しかし屏風岩山の頂上に着こうという寸前で、茂っていたつるにひっかかり足をたいそう痛めてしまった。（つるは直径１０センチ程の大きな葉を持ち、辺り一帯をはっていた。この葉を地元では俗に「肥っ葉」と呼ぶそうです。）足を痛めた為にその大石を二度と背負う事ができず、その大石をそこに置いて、残念そうに足を引きずりながら帰ってしまったという。この大石は今もそこに置かれてあり、源八幡太郎義家が縄をかけ背負ったこの大石には今でもその時の縄の溝がくっきりとついていると云われています。

源八幡太郎義家とは昔、蝦夷征伐に来た軍であり、特に、安部貞任一族（安倍とも表記している書物もあり、記載の通り表記します。）との戦いに関する言い伝えは北部地区に多いことがわかりました。また、文献を探ってみると舟渡のこの石に関する昔物語が他にも存在しました。

「みちのくの民話」東北農山漁村文化協会編集　より

舟渡の八幡石にまつわる話（舟渡）

小国町と若山集落の中間に金毘羅様という山があり、この金毘羅様の川の下に、通称「釜の淵」と云われているところがあったそうです。

その淵の真中にぽっかりと浮いたように大きな岩があります。その岩は八幡太郎義家が安部一族との戦いの時、金毘羅様の頂上から、投げ落した岩と云われています。

「小国の民俗風土記」より

八幡石（若山）

若山集落より約１キロメートル離れた所に大石があります。

その大石のまわりには小さな川が流れています。この大石のある側一帯が沼になっていてそれはとても深く、沼は曇った日などはいかにも悪魔が出そうな錯覚に陥りさえさせられます。鎌倉時代、八幡太郎義家が沖庭山に登って東方の山を望み自分の力をたよりに、ここの大石を向こうまで投げようとして、足をふんばり大石を持ち上げ力一杯投げました。大石は、大きなうなりをあげながら大空を魔物のように、東方の山の一番手前の今の金毘羅様の山に当るかの様に見えたが、途中この若山の現在の位置に半分以上も土にめりこんでしまったそうである。それからいく日も経ちこの小川の淵に沼の様になり現在にいたっている。

「おきにわ」より

八幡石の由来（越戸）

昔、源八幡太郎家が安倍一族と戦いをした時のことです。

安倍一族に追いかけられた八幡太郎義家の軍は越後（新潟県）の八ツロから小国町の小渡に通ずる道を、一生懸命後ろを振り返りながら逃げてきました。

そして越戸を通り過ぎる頃には、義家の軍はすでに息は、きれぎれに足は棒のようになって、とても前進出来ないような状態になりました。

越戸から少し小国側にある前坂という所に来た八幡太郎義家の軍は、後ろを何度も何度もふり返り「ここまで来れば安心だ。敵はまだ見えぬようだから、一休みして行こう。」
と近くにあった丁度いい石に腰をおろしました。

敵が来たらいつでも逃げられるようにと、多数の部下を見張りにつけ、自分も自ら敵の方向をじっと睨みつけていました。

しばらくの間そうしていると、家来の一人が、「敵がみえてきたぞ」と大声でどなりながら、八幡太郎義家の所にやって来ました。
「そらきた、皆早く準備せい。」
と八幡太郎は休んでいた石から素早く立ち上がり、そして小国の方に向って逃げました。
それ以来、この八幡太郎義家の休んだ石を人々は「八幡石」と呼ぶようになりました。

またこの八幡石をよくみると、ところどころ凹んでおり、これは八幡太郎が休んだ時に、その重さで凹んでしまったと言う人もいます。

源八幡太郎義家と安部一族が登場する昔物語は他にもありました。

じしゃからの木の話（綱木）

八幡太郎義家が奥州の豪族である安部一族を征伐するためにやってきた時のものです。

小国町大家綱木の箱の口集落の中間にさしかかった義家の軍は、この２つの集落の間にある峠を越えようとしていました。

おりしも、冬将軍が容赦なく吹き付け、義家の軍の全身は遅々として進みません。また兵隊は疲れ果て、食料は残り少なくなり、朝廷とのれん楽は思うようにいかなくなり、悪戦苦闘していました。それにもまして東北の冬は厳しいものです。特に小国地区は日本でも有名な豪雪地帯。だから八幡太郎義家を始めとする彼の部下はいかにして前進しようかと考えておりました。

しかし折からの深雪のため、ついに腰までうまり、弓を捨てるもの、脱落する兵も出てきてまったく動きがとれなくなりました。山々もうっすらと暗くなり、さすがの義家の顔にもあせりの色が表れてきました。そしてついには「ううむ、どうしてくれようか。」とため息まで出てきました。

そのような状態にみんながっかりしていると、先程から一人で何か熱心に考えていた家来の一人は、何を思ったのか突然ポンと手を打って「そうだ、これがいいぞ。」と腰の刀を抜き、自分の近くにあった、まっすぐに伸びた三尺位の木をすっぽりと切り取りました。まわりの兵隊は何をするのだろうと興味をもって、彼の仕草を見つめておりました。

木を切った家来はそれを少しずつ曲げて大きな楕円形の円をつくり、それをつるでしばり、「かんじき」を作りました。

（かんじき・・冬、雪の上を歩くときに長靴の底につける直径３０センチほどの楕円形のもの。これを履くと雪にぬかることなく歩くことができる。より、歩きやすさ・軽さを追求してつま先を中心に踵を上げる事ができる「外国版かんじき」がスノーシューという名前で市販されており、現代では冬場のレジャー（スノートレッキング）などで利用されています。これは雪の上でも走ることができるすぐれものであります。）

それをさっそく八幡太郎義家の前に持って行き、その前で足につけて、深雪の上を歩いてみました。義家が見てみると、今まで腰までもぬかって歩いていたのだが、それを履くと足首までしかぬかりませんでした。それを誇らしげにはいて歩いている家来を見た義家は「おおっ、なんといいものを考えついたものじゃのう。」と言いながら、こんどは義家がつけて歩いたところやはり中々歩き良いものでした。これはすばらしいものだと八幡太郎はすぐに家来に命じて、木を探させたくさんの「かんじき」を作りさっそく峠を登り始めました。そしていよいよ義家の軍は峠にさしかかり、「そら、もうすぐ頂上だぞ。」と最後の力をふりしぼり、おもいっきり力を入れた時です。突然八幡太郎義家の履いている「かんじき」がポキリと折れてしまいました。

生まれながらにして気の強い八幡太郎義家は、大変腹を立て「もうすぐ頂上だというのに縁起が悪い」と壊れた「かんじき」をその峠から力一杯投げてしまいました。

この時から、現在でもこの峠から小国側には、この時に使用したといわれる「じしゃからの木」は沢山あるが、この峠の向こう側（綱木）方面には「かんじき」に使う「じしゃからの木」は少ないと云われています。また、これ以後このあたり一帯で用いられる「かんじき」のほとんどが「じしゃからの木」で作られたものだそうです。

赤はげの話（古田）

小国町古田集落の南方に、赤はげと言われている場所があります。この場所は、山の斜面がくずれたようになっており、山肌は赤色がかかっております。昔、源八幡太郎義家と安部一族との間に戦いがあった時に、八幡太郎義家は山向いの金毘羅様に陣取り、安部一族は、この赤はげに陣取って、弓を引き合い、刀をふりまわして、戦いをしたと云われています。戦いは、安部一族の不利となり、安部一族は、ついに逃げなければならなくなりました。その時、八幡太郎が追討をかけたところ逃げる安部一族の者が足をふみはずして、その山の上から下の川に転がり落ちたと云われています。それと同時にあまりに大勢のため、山の表面は崩れてしまったという事です。その山の上から転がり落ちた馬や人の血が、その崩れた山肌の土にすっかりしみ込んで、あの赤い土になったといわれ、それ以来この土地を誰ともなく赤はげと呼ぶようになりました。

矢種沢の話（矢種沢）

昔、蝦夷征伐に来た、源八幡太郎義家の軍と安部貞任一族の軍とが戦いをした時の事である。源八幡太郎義家の軍は現在の小国町若山集落と古田集落のほぼ中間に位置する金毘羅山に陣取りました。また敵の安部一族は、川（現在の金目川）をはさんで向い側の赤はげという場所に陣取りました。そして、互いに弓を引き合い、激しい戦いとなりました。敵の安部一族の打った矢がうなりをあげ、激しく空中を飛んで来ました。その時、源八幡太郎義家は驚きもせずに、軍の先頭に立ちはだかって、不思議な術を使った。すると、その時突然、ゴウゴウと強い風が吹きあれ敵の打ってくる矢は、自分の軍陣から反れて別の方向の沢の中に入ってしまい、味方の危機を救い、一箇所に飛んでいって近くの沢に落ちたと云われています。その後この沢からしばらく矢が発見されず、「矢をたねる」という意味で、弓の矢が落ちた場所を矢種沢と呼ぶようになったと云われています。尚、この沢は現在でも矢種沢と呼ばれています。金毘羅山の上の岩にある小さな窪みは義家の馬の足跡と伝えられています。

同じようなこんな話もありました。

金毘羅山の話（古田）

古田の集落の入口の左手にある小高い山が金毘羅山である。昔この山に八幡太郎義家が立籠り、西方の山に安部貞任を迎えて戦ったことがある。その時互いに弓の射ち合いをしたが、義家が金毘羅山の上で術を使うと、貞任の軍の矢は金毘羅山からそれて隣の山の沢の中へことごとく飛んでいった。

その後この沢からしばしは弓矢が発見されたので、矢種沢と云われるようになった。

金毘羅山の上の岩にある小さな窪みは義家の馬の足跡だといわれており、義家の家来がこの地で馬に煮た豆を食わせたら、馬は藁の中へ豆をこぼした。

それから数日たってその豆を見つけたところが、豆からはすでに白い糸が立って納豆になっていた。これが納豆のおこりであると伝えられている。

この納豆の話の詳しい昔物語が違う本に記載されていました。

納豆の話（古田）

昔、現在の古田集落において源八幡太郎義家と安部一族の間で戦いをした時のお話です。先ほどまでの激しい戦いも夕暮と共に次第にひっそりとして来て武士達は、ほっと一息つきました。

源八幡太郎義家は味方の陣地をゆっくりと一回りして歩きました。馬は連日の戦いで疲れてしまって、ぐったりと元気なくつながれていました。

源八幡太郎義家は馬を見まわしておりましたが、やがて馬の側に近寄ると「これは、これは、連日の戦いでさぞつかれた事だろう」と鼻づらをやさしくなでてやりました。「これ馬番、馬はたいそう疲れている様だ、可愛想にこのままでは、やせおとろえてしまうぞ。」「はい、私も大変困っているところです。どうしたら良いものでしょうか。」「ウーム、そうだな、豆でも沢山煮て食べさせて、元気をつけさせる事だな。それから、大変疲れているようだからゆっくり休ませる事だな。」

馬番はさっそく、大きななべに豆を沢山煮て、桶に入れて馬に食べさせました。馬は最高の御馳走だと喜んで食べていました。そのうち、席をちょっとしたはずみにその煮た豆を、桶もろともに、しきわらの上にひっくりかえしてしまいました。そんな事とは誰も気がつかず夜になり、そして一夜が過ぎました。

さて、次の日、馬番が馬に朝飯を食べさせようとした時です。昨日、馬がひっくりかえした豆はそのままひっくりかえっておりました。桶を見つけた馬番がなにげなく桶をおこそうとすると、その桶の下のわらの中から、何ともいえない旨そうな匂いが流れてくるではありませんか。馬番は「このすばらしい匂いはなんだろう？」と静かに桶の下のわらを広げて見ますと、それは昨日こぼれた、煮た豆だったのです。

「ずいぶんうまそうな匂いがするものだ」と馬番はその豆をそっと手に取ってみますと、ねばねばした無数の糸が豆からたっていました。鼻の近くまで持ってきて匂いをかいでいた馬番は「こんなうまそうなにおいのするもの、きっと人間が食べられないわけがない。」と一粒、口に入れてみましたが。それがまた非常に美味いのです。馬番は「これはうまいぞ」とつい大声をあげてしまいました。

突然の馬番の大声に何事がおきたのだろうと、源八幡太郎義家を始め多くの家来達が馬番の所に集まってきました。馬番からこのおいしい豆のことを聞いた源八幡太郎義家や、集まって来た多くの家来はその美味そうな匂いを嗅ぎながら、さきほどの豆を囲んで覗きこみました、みんなそれぞれ豆を口に入れました。なるほど、とても美味いのです。みんなはあまりの美味さに口をそろえて、「ナント、ナント、ナント、ナント」といって感心しました。

それからこの食物を人間が食べるようになり「ナント、ナント」と驚いたことからナントウ・ナットウと呼ばれるようになりました。

これが「納豆」の始まりだと昔から古用集落に伝えられています。それから農家では煮た豆をわらにつつみ一定の温度を保って二昼夜ぐらいおいて「納豆」を作っていたそうです

生活には必要で、重要な役目を果たしていた馬や牛は、より身近な存在であったためか頻繁に小国の昔物語に登場します。隣村の金目でも馬に関する話がありました。

また、農作物が豊かなこの土地では食に関する話も存在しました。

（平成２１年度小国高校レポート「小国町の昔物語について」）より

幻の馬の話（金目）

昔、山また山に囲まれた金目集落の夜の出来事。夜もふけ集落中が寝静まった頃、集落の一人の若者が、せっせと夜仕事をやっていました。仕事を終った若者は「どれ仕事もちょうどきりがついたから寝るとするか。」と一人ごとを言いながら、戸締りをしようと外に出た時です。若者は、なにげなく満月の光に照らされた集落の近くの山に目をやった時、突然その山の裾を、ボーと幻のように一頭の白馬があらわれました。「おや？何だろう、今頃の時刻にまさか、夢なのだろうか」。と不思議に思いながら幻のように現れた白馬をじっと見ていると、今度は、幻のようにボーと消えていくではありませんか。若者は驚きました。「これは、どうしたことだろう、白馬が現れたり消えたりして・・」と薄気味悪くなってきました。しかし、人間というものはこうなると、その正体を知りたがるものでこの若者は一層その事に興味が出てきてその附近をじっと見まわしていました。すると今度は、さきほど山のそでで幻のように消えた、あの白馬が山の項上にボーとまた幻の如く現われてきました。そして、じっと集落を見下ろしていました。さっきから見ていた若者は「これは何ちゅう事だろう、白馬が山の下に現われて消えたと思ったらこんどは山の頂上に現われて、そしてこっちを見てやがる」と一人ごとを言いながら見ているとボーと白馬は幻のように消えて見えなくなりました。若者は、今度はどこに現れるのかとあちらこちら見まわしたが、その晩は現われませんでした。次の日若者は昨夜の不思議な出来事を、村の人々に話しましたが、村人達は「夜の夜中に白馬か現われて消えたと思ったら、山のてっぺんに現われるなどとんでもない。おまえは寝ぼけて夢でも見ていたのだろう、人を驚かすにもほどがある」と誰一人として信じてくれる者はありませんでした。だれにも信じてもらえなかった若者は、「そうだ、もしかしたらまた夜になると現われるかも知れない。」と次の晩から夜が更けてくると、じっと集落の近くの山々を見まわしつづけました。次の日も次の日も、しかしついに白馬は現われませんでした。そして数日たって、また満月の夜、若者はじっと山を見ていると、最初の晩のようにボーと白馬が現われてきました。消えては現われ、現われては消えながら、じっと集落を見下ろしていました。

若者はその白馬を見ながら「やつめ、満月の晩になったらまた現われたな。あいつの正体は一体なんだろう」とつぶやきながら見ていると、その馬は突然大声でいななきました。すると集落に突然不思議な事がおこりました。というのは今の一声で集落に飼ってある馬という馬が突然狂ったように動き出し、馬屋から飛び出す始末です。

そして狂ったように飛び跳ねながら、さきほど音のした方へドッと走って行くのです。若者は「こりゃどうしたことだ、集落中の馬ちゅう馬が、みな走っていくじゃねえか。」と驚いて見ていると、今度は、山の項上に幻のように現われた白馬が空を飛ぶように山を下ってくるのです。

さあ集落中はハチの巣をつついたような騒ぎです。「おらの家の馬が逃げたよう」「おらの家の馬だあ」「あっちへ行ったぞ」「そら、山の上からおりてくる白い馬に向って走って行くじゃねえかあ」と集落中の人達が外に出てきました。

小屋から逃げた馬どもは、山から降りてきた幻の白馬を先頭に狂ったように田畑かまわず集落中をかけ走りました。集落の人々が見ている中を一晩中走りまわり、夜明け近くになると、今まで先頭になって走っていた白馬がボーと消えていきました。

するとどうしたことか、今まで狂ったように走りまわっていた馬々は、何事もなかったような顔をして自分の家に帰って来たのです。さて次の日集落の人々は大騒ぎです。夕べの白馬のおかげで田も畑もめちゃくちゃになってしまったのです。「ああ、せっかく実ったのに、相当だめになってしまった。」という声があちらこちらで聞かれました。それから後の満月の日も幻のような白馬は現われ集落の田畑を荒らしまわりました。集落の人々は、満月の度にこんなことが続いては、とんでもないことになってしまうとさっそくみんなで相談しました。その結果、いつもの馬が暴れて走りまわるところに石をならべて「ませ」を作ろうということに決まりました。次の日から早速その工事にかかり大きな石をならべて「石ませ」を作りました。

それ以後集落はこの幻の白馬からの害は免れ、再び平和がやってきました。そして、それ以後

この石で「ませ」を作った場所を誰からともなく「石ませ」と呼ぶようになったと云われています。尚、現在もこの「石ませ」には大きな石がごろごろし歩きにくくなっているそうです。

（みちのくの民話）より

あずき取りの話（折戸）

小国町北部の「折戸」に「ほうの木沢」と呼ばれる沢があります。昔からその沢には昼でさえ暗くさみしい場所と云われている所がある。ある時、折戸集落一帯に奇妙な噂が流れはじめました。「ほうの木沢を一人で通ると正体の知れないバケモノが出る」というのである。バケモノというのは通る人に、どこからともなく「モチ米あるが、あずきがない」「誰でもいいからあずきくれ」と歌うように話しかけてくるのだそうです。しかしそんな噂が流れても村人は信じることもなく噂話を聞いていました。ところが噂が流れて間もなくのある日の事。一人の若者がどうしてもほうの木沢を、あずきを持って通らなければならない用事ができてしまいました。その若者は臆病で非常に気の小さい男でした。あずきの入った袋を肩にかついで、ほうの木沢にさしかかった時には、陽はすでに暮れ、うすぐらい夕暮となってしまいました。昼間でさえさみしいといわれているほうの木沢を薄暗くなってから一人で通るのですから、なんともいえない不気味さが若者の心を誘いました。最近集落に流れていた噂を思い出しては小走りでその沢を通り抜けようとしましたが、突然山のどこからともなく「コラまてぇ」という奇妙な声がして、小走りの若者の足を止めました。若者は「そら出た」と思い、とっさにあたりを見まわしたが、なんの姿も見えませんでした。そのうちに前から、噂で聞いていた歌ともお経ともいえぬ不気味な声が流れてきました。「モチ米あるが、あずきが無い。」「誰でもいいからあずきをくれ。」「あずきをくれ。」と言っているのです。若者は驚くあまりに、あずきの袋を肩にかついだまま懸命に走って逃げようとしました。ところがいくら走っても「あずきくれ」「あずきくれ」とその不気味な声は若者を追いかけてきました。若者はどうしようもなくなり、肩のあずきを袋がらみ沢に投げ入れて「俺の持っていたあずきは、いま沢に置いたから命ばかりは助けてくれ」と大声で叫びました。すると不思議に不気味な声は、ぴたりと止まりました。若者は一層の気味悪さに一目散に逃げ帰りました。翌日この話を集落の人々に告げました。その話を聞いた村人達は若者の案内で、昨夜バケモノが出たという、ほうの木沢の場所に行ってみました。するとなんと驚いた事にその場所には、袋いっぱいに入れておいたあずきは一粒も無く、空になった袋だけが昨夜と同じ場所に投げられてあったそうです。それ以来、あずき取りの噂は村人を恐ろしくさせ、あずきを持った者は、ほうの木沢を通らないようになったということです。

樋の沢の沼さんべに伝わる話（樋ノ沢）

北部の樋ノ沢に、通称「さんべ沼」と呼ばれる沼があります。そのさんべの沼の精は大きなどじょうだと昔から伝えられ。そのどじょうは水や沼の付近を荒らされることを非常に嫌っているそうです。ある時、そんなことを知らない集落の若い者達がその沼に石や土をたくさん投げ入れました。すると今まで晴れていた空が突然曇り大雨が降り始めました。どうしたことかその雨は何日も何日も降り続き、その地方一帯が大洪水になったということです。

そのため、その地方の川沿いや田畑はその年、米や穀物が全然とれなかったそうです。それ以後村の人達は「さんべの沼に石や土を投げると、さんべ沼の主の、どじょうが怒って大雨を降らせると云われるようになりました。

きゅうりの話（栃倉）

昔、栃倉という集落には、大変きゅうりの好きな天応様という神様がおりました。

昔から、きゅうりをいろいろな方法で食べられておりましたが、文化の発展と共に生活が豊かになってくると、人々は珍しいものだけを求めて贅沢な生活をするようなり、きゅうりなどという野菜は、以前のようには食べなくなりました。

そして栃倉集落の人々は、きゅうりを食べたとしても半分食いにして投げたり、充分熟さないうちに放って捨てたり、また長い間置き忘れて腐らせたりする。などあまりにもきゅうりを粗末に扱うようになりました。これを見たきゅうりの好きな天応様は、たいへんお怒りになり「これでは人々の生活が贅沢すぎて堕落していくばかりだ。少しこらしめてやらなければなるまい」とお考えになりました。そして天応様は、この集落にきゅうりを作ることを禁じてしまいました。

しかし栃倉集落の人々は、きゅうりを作ることを禁止されても何不自由のない平和な生活を送っておりました。それから数十年も経ち、そんな昔の言い伝えがすっかり薄れてきたある年、集落の一人がその掟を破り、畑にきゅうりの種を蒔いてしまいました。３ケ月が経ち、それはそれは、みずみずしい、とてもおいしそうなきゅうりがたくさんなりました。そしてその村人は、さっそくカゴ一杯にとってきて「これは美味しい」といって食べたところ、急に腹をかかえて苦しみ出しました、薬を飲んで寝てはいましたが、いっこうに良くならず病気は悪化をたどるばかりでした。そしてついにその人は年の暮れに死んでしまったということです。これを知った村の人々は「天応様の掟を破った祟りにちがいない」と恐れて、それ以来この村には、誰一人としてきゅうりを作る者はいなくなりました。

その後、長い間「きゅうり」の作らない時代が続き、板倉集落では他の土地で作ったきゅうりは食べて良いが栃倉集落内にはきゅうりを作ってはならないという風習が続いているそうです。

日本のエコロジカルフットプリント（地球環境にかけている負荷）によると世界中が日本人のような消費生活を行った場合（資源を生産する土地・廃棄物を吸収する能力を考えた場合）地球が２、３個必要であるとの記事を読み、日本は輸入資源に頼り資源を持っていない事を自覚しておきながら、どうしてこんなにも無駄な消費をする生活をおくるのだろうと考えたことを思い出しました。そんな警鐘ともとれる話は昔からあったことを知り、その抑止力といえる物は、昔は「信仰的なもの」から現在は「食の安全」へと変わったような気がしました。

一方、家畜として飼われていた、鶏（鳥）に関しては次のような話もありました。

金色のにわとりの話（金目）
昔、金目集落は、天候に恵まれ、人々はたいへん一生懸命働いたので毎年豊作が続き、幸せな生活を長い間送っておりました。そんなある年の事です。突然あたりが暗くなったかと思うと、ものすごい大雨が降り出し、これが何日も続きました。この悪天候のために、その後虫やうじがわき出て、それがもとで悪病がはやり出しました。人々はもがき苦しみ、働くことが出来なくなったために農作物が全々とれなくなり、人々は、困り果てた末に家宝であるものを持ちより神様にそれを奉納し何度も拝みましたが何の効果もありませんでした。そしてその年はとうとう凶作で暮れてしまいました。食べ物がないために、老人や子供達は、次から次と餓死するありさまでした。そうしたある日、目も開けていられないほど西の空が黄金に輝いたかと思うと、そこには一羽の美しい黄金のにわとりが現れました。村人達は、あれよあれよと空を見守っていました。その美しいにわとりは、突然集落に舞い降り今までたくさん、はびこっていたうじや他の虫を食べてしまったということです。そのため村人の病気はすっかり回復し、人々は以前の幸せな生活をとりもどしました。集落の人達は、これも金色のにわとりのお陰であるとし、それから後に神として祀りました。それからというもの、金色のにわとりが集落全体を救ったのだと信じられ、その後、金目ではにわとりの肉や卵を食べなかったと伝えられています。（集落以外の他からもってきた卵は食べても良いといわれている。）その時祀った、にわとりを描いた掛け軸が今でも集落の家に家宝として残っているといわれています。

「鶏肉を食べない」理由としてこんな話もありました。

洛の里の話（金目）
平家が敗れた時、三条郷の斎藤孫右衛門と孫兵衛という兄弟が、金目川の上流、不動沢という所に隠れ住んだ。彼等は主に狩猟を営んでいたが、多少の耕作も行ったらしく、不動沢のほとりのザイショノタイラというところには畑の跡が残っているそうである。時は経ち後に不動沢から３里ほど下流の今の金目に移住し、そこを開拓した。孫右衛門は敬神家で人望もあったので、そこに家を建てる者も出てきた。集落の者は農耕と共に山の生活を営んでいたので村の神を鎮守として祀った。又、孫右衛門は、元の住家のあった所に不動院と称する祈願堂を建てた。そこの岩壁には大人ほどもある不動尊があり、金目の人たちは毎年旧の８月９日に参拝した。孫右衛門はある時、旅に出た。（キリシタンの信者の嫌疑を受けて捕えられたとして記された物もあります。）その時、村はずれまで見送ってきた人々に（「金目村は自分のいない後に、洛の里になるかも知れないため気をつけなければならない」と言われていた。）留守になる旨を告げ発った。その後孫右衛門からはなんの音沙汰もなく２年の年月が過ぎた、その年の秋のことである。孫右衛門の言う通り、沢山の洛が現われ農作物荒し家畜を襲った。孫右衛門は３年目にようやく村に帰ったが、洛に荒らされ困窮している村を見て自責の念から断食祈願を決し不動院にこもり、家伝の祭文を紐解き一心に祈願した。するとそれから７日目に雷雨が起り、一夜のうちに洛どもはことごとく死んでいった。それから金目村は平穏な里に戻ったがこのことがあって以来孫右衛門は洛の棲息地に鶏は禁物であるというので、村人に鶏を飼うことと鶏肉・鶏卵を食用にすることを断じて禁じた。村の鎮守に鳥居のないのも鳥に因んだ一切のものを嫌うゆえんであるという。

孫右衛門の神通力の話には、続きと思われるような次のような話もありました。

蛆が沢の話（金目）
金目集落の飲料水の源をなしている沢を蛆が沢（俗にウンジャ沢）といっている。孫右衛門が神通力によって殺した狢の死体には、この沢のあたりに沢山ころがって蛆が湧き、飲料水を汚すので村人は困惑した。その時、孫右衛門はまた不動院にこもり、祭文によって祈願したとろが、それから７日目の朝、村に一羽もいないはずの鶏が鳴き、その夜に金目川の水が逆流して、蛆の湧いた狢の死体をきれいに流し去ってしまった。そうである。 蛆が沢の名はこれに発するものであるし、金目村に鶏の声がすると、それに引続いて何か不思議なことが起こると伝えられているのも、それに起因しているという。

山深いこの土地では、山岳信仰が存在し、信仰に関しての話も多く存在します。

祭文の話（小渡）
孫右衛門は、祈願に用いた祭文の神通自在なのに驚き、子孫への影響を怖れてその中の二巻だけを残し、他の恐ろしい祭文は庭先の大石の上で焼いてしまった。この大石は、「祭文焼捨の石」といって、今も孫右衛門家の庭に残っている。焼け残った２巻の祭文も不思議な神通力があって、その後もよく人々を災害から救った。旱天の際には他村からも雨乞いに頼まれて、孫右衛門家の主人が、祭文をたずさえて出かけることが近年に至るまであった。又、明治４２年の火事に、当時１１戸の金目集落は６戸が全焼したが、そのとき孫右衛門の主人は、祭文をひも解いて祈願したところ、孫右衛門家の屋根には、たちまち雲が湧き、軒からは雨滴がたり、いくら火が飛んで来ても燃えうつることはなかったという。

禁忌の話（金目）
金目集落では鶏を嫌う外に、産や死の「穢れ」（けがれ）を忌むことも甚だしく、特に火の混交が嫌われている。「穢れ」のある者に対しては、煙草の火は火鉢に取ったりして別火にして使用させ、お茶や爛酒を飲ませるには、一杯ごとに茶碗や杯を洗うか、又は拭いて使用する。飯などは一度盛ってから他の茶碗に移して食べさせるという。但し、肉親の間ではそうではない。又、「穢れ」のある家に訪問した時などは、塩で身を清めてから自宅に入るそうである。

電権（いかづち）現神社由来の話（古田）
天明初年の頃（約１８０余年前）古田木村久右エ門家の三男、寅之助という若者がおりました。ある日、市野沢に仕事にいこうとして、市野沢の堰あたりまで行ったところ、空全体がにわかに曇り閃光がひらめき大音響とともに彼の頭上に落雷した。彼はその場に投げ倒され、気絶したが、やがて正気にかえり起きあがりあたりを見わたしたところ一面が焼け野原になっていました。寅之助のからだにはカスリ傷ひとつもありません。ただ傍らに珍しい石が１つ落ちていました。その後、家に帰りこの事を話した彼は、今更のように落雷の恐ろしさに身が縮むとともに、一命を取りとめたのは、これこそ電神の加護によるものだと信じ、拾った奇石を御神体としてその場（セキ場の上）に祀ったそうである。これが電権（いかづち）の始まりと云われています。

長田の観世音の話（小渡）

昔、小渡の長五郎という者が、朝早く田の水をかけに行くと、田の中に光るところがあった。何か埋っているに違いないと思い鍬で掘るとカチンと音がして金の観音像が出てきた。

長五郎は、持ち帰って屋敷に安置した。しかしそれから長五郎家には子どもが育たなくなったという。それは観音様の傍で子どもが遊び不躾な振る舞いをするからであろうと云われていた。

寛政１１年（西暦１７９９年）一子が死亡したので、その子どもを葬ると同時に観音様を針生の吉祥寺へ納めた。小渡地区の長田から発見されたので長田の観世音という。以来、観音様が発見されたこの地では、化学肥料似外の肥料は一切入れないで耕作しているそうです。観音像の丈は、１尺２寸で背に「西泉」と鋳物師の名が彫られている。この観音様の御開帳をする時にはどんな晴天の日でも雨が降ると云われている。

船山神社に伝わる話（樋ノ沢）

小国町北部の樋ノ沢の小高い所に船山神社が祀られています。船山神社とは、この神社の祀られているこの場所が船の形をした小高い山の上にあるからだと言う人もいます。

昔、小国郷の平野一帯には、まだまだ多くの水が溜まり、大きな湖であった時代。山の間を広々と続いている湖とまわりには、雄大にそびえ立つ山がありました。その湖水の上を、神様が乗った船が北部の中島に向い漕ぎ進んでいました。ところが船が今の樋の沢付近にさしかかった時に突然の大嵐に遭い、その場に沈んでしまいました。その船には、大事な宝物が積んであったのでした。神様は命からがら湖の岸に泳ぎつきました。一息ついて神様は沈んだ宝物について考えました。「あの重要な宝物を水の底に沈ませておくわけにはいかない」とその船が沈んでいる一帯の水を干すことにしました。それで他の神々の力を貸り、船の沈んでいるまわりに高い土盛を作りました。その結果、神様は宝物を取る事ができました。その後神様はこの苦労して作った土盛の上に神社をたてまつりました。それが現在の船山神社であるといわれています。

杉の下の話（今市）

今市集落の入口から南方に約１００メートル位離れた所に代神様が祭られています。代神様の近くにはあまり大きくない沼があり、そばに巨大な杉の木があります。この附近には水田もあります。

ある年の６月の朝、今市集落の大地主である人が言った「今年はいつもの年よりも、早く植えて、３日で終さなければいけない。」男達は夜明け早々に田んぼへ出かけた。一日中一休みもしないで、働いたけれども、いっこうに田植えは終らなかった。「主人に叱られるのがこわいから」と言っては、みな一生懸命植えた。それでももう少しというところで西へ日が暮れかかってきた。その時、ある一人が西の方角に向かって、「どうかもう、ひととき（２時間）だけお日様を下さい。」と頼んだ。すると不思議な事にひとときだけ日が照りやっとの事で終った。男達は喜んで主人の所へ帰った。しかし、意地の悪い主人は、「今日１日かかっても終えないのにどういう事だ」と不思議に思った。あくる日、主人は昨日植えた所を見に行った。不思議な事にいくら見てもちゃんと植えてあった。しばらくして、今度は日の照りが足りなく西の空に穂が倒れて

いった。村人のある一人に頼んで、再び神様に聞いてもらったところ「東の方に大木がある。稲がたおれるのはその大木のせいである。とお答えになりもう一つ、お前達がお日様に頼んで、ひととき日を伸ばしてもらったにもかかわらずその時ばかり喜び、そのあとは何とも思っていない。そのせいでもあるぞ。」と言った。男達は、それからというもの、日の暮れる時分に、いつもお日様に向かって祈った。しかし問題はその巨大な大木である。その巨大な杉の木の為に日光は遮られて近くの水田は西の方に倒れている。そこで村の人々と一緒にこの木を切ることにしました。ある日、村人達といっしょに杉の木を切り始めました。しかし、大きくて木が思う様に切ることが出来ず、太陽が西の空に沈み、あたりがうす暗くなってきましたが、その木を切りたおすことが出来ないので翌日切る事にして、みんな家に帰りました。翌朝早く杉の木を切るために沼の所に行きました。しかし、たしかに昨日途中まで切ったはずの杉の木の切り口がどこにも見あたりません。村人達は驚いてあたりを見まわして見たものの、その木の切口がないのです。この様な事が何回もくり返されるので、村人達は困ってしまいました。こんどは前回よりも多くの村人をつれて行き、一日やっとの事で切り倒しました。木は大きな音をたてて、そばにあった沼の中に倒れ、沈んで影も形も見えなくなってしまいました。今までも木が沈んだと云われている田んぼの中からは時々、木の枝が出てくると伝えられています。そんなことがあり、その附近の水田を以来「杉の下」と呼ぶようになりました。

魔法のつえの話（五味沢）

小国町の北部の五味沢村は、昔から米が豊かに実る村でした。春がくるのは遅かったけれど、５月ともなれば、雪がまったくなくなり、山桜を始めとして、いろんな花がいっきに咲き乱れ、人々は、豊作を願いながら、農業に精を出して働き毎年平和に暮していました。

しかし、ある年のことです。どうしたわけか雨が降らず毎日のように日照が続きました。初めはあまり気にしなかった村の人々も、あまりにも雨が降らないので、気になり出しました。水田はからからに乾き、稲は枯れ始め、川の水は日に日に少なくなり、とうとう流れなくなりました。ついには井戸が枯れ始め人々の飲む水さえ欠乏することになりました。村の人々が一滴の水でも大事に使うようになっていた、そんなある日のことです。

ぼろ服を身にまとって、杖を持った一人の老人がどこからともなくやってきました。その老人は歩き疲れから、今にも倒れそうになりながら一人の村人にこう頼んだ。「水をくれ、のどが乾いてのう。」しかし、その頃は村人でさえ水に困っている状態で、まして他人に飲ませる水などはありませんでした。「おじいさん、おじいさん、水なんかありませんよ。」「自分達でさえ飲めないのに、他人になんか飲ませる水はないんでのう。」「勝手に探して飲んでくれ。」とかえって怒られてしまう始末でした。

老人は困り果てました。のどは乾わくし、水は無い。一人で思案しておりました。すると何を考えたのか、その老人は突然立ちあがり自分の持っていた杖をその辺の井戸に持っていき下を覗きこんでおりましたが、次にその杖で「ボン」と井戸を叩き、しばらくそこに立っていたかとおもうと、一滴もなかった水が少しずつ下の方から湧いてくるではありませんか。するとその老人はその水をさも美味そうにのどを「ゴクン、ゴクン」と鳴らしながら一気に飲みました。これを

見ていた村人達は大変驚き、そして老人に「どうか私達にも水を恵んで下され。」と頼みました。すると老人はそれを心よく引き受け、この村の人々に水を恵んだそうです。集落の人々は大変喜び、またその老人を尊敬し称えたそうです。

この時、井戸を叩いた杖の跡が今でもその井戸に残っていると云われているそうです。それからというものその井戸は枯れることがなくなったその井戸に水くみ村の人々たちは足繁く通うようになったという事です。

沖庭山権現様に伝わる話（沖庭）

沖庭山には、昔から大石があり神様として人々に信仰されています。

この石は昔、となりの村から飛んできたといわれている石です。この石のある近くにある「雨のざあざあ降る日、１人の村人がキノコを取りにやって来ました。その村人がキノコをたくさん取り、山を下りようとして、ふと気がつくとそこに大きな石を見つけました。「これはこれは、なんと美しい石なんだろう。」と言いながらその石に近づいてよくみると、その石は今まで見たことがないような珍しい石でした。「こんな珍しい石があるならば、この次にキノコを取りに来た時の目印のため、笠をかぶせていこう。」と一人ごとをいいながら、自分のかぶっていた笠をかぶせ意気揚々とキノコを背負い、山を下りていきました。

この人は、この美しい石が昔から沖庭山に祀られている権現様とは知らなかったのです。
村人が家に帰ると、突然日がかすんできて、だんだん見えなくなっていきました。

翌日、その村人の目が見えなくなったというううわさは、あっという間に村中に広がりました。それを聞いた村の人々は、その村人に見舞いにきて、その日の様子を聞きました。日の見えなくなった村人は目の見えなくなるまでの自分の行動や昨日の山での話の一部始終を村の人々に話しました。それを聞いた村人の物知りは「それはきっと沖庭山の権現様にちがいない」「目が見えなくなったのは権現様の石の祟りにちがいない。」と言いました。それを聞いた村人は、昨日のキノコ取りに行って美しい石に笠をかぶせてきた自分の軽はずみな行動を反省し、居ても立ってもいられなくなり「たとえ目が見えなくとも、山に登ってその笠をとろう。」と決心をしたのもつかの間、すぐに仕度をして山に登ったそうです。「権現様、権現様私は何も知らないでしたことなのです。どうぞお許し下さい。」と何度も何度もつぶやきながら夢中で這いながらも登った。あちらこちら、さまよい歩き、ついに昨日の石を手さぐりで見つけることができました。村人は急いで手をのばし、昨日かぶせた笠を取りました。すると不思議なことに少しづつ目が見えてきたそうです。村人は喜び勇んで家に帰りました。しかし、この事があって以来、この村人の親類には、生まれてくる子どもがほとんどヒンガラ（目が見えない）になって生まれてきたと云われています。このいわれがあるので、毎年旧の８月には獅子踊りをやってこの石を祀っているそうです。この石の納められている沖庭山の御本堂の改築の時は、一週間前から魚等の生臭いものを食べず、山に登り水取沢で水を汲み身体を清め神社に登り、法院様２人で、その石を白布で巻き、上から「荒こも」でくるみ、荒なわで村の若者に背負わせて、御本堂の後に有る股木の３本股に上げておくそうです。重さは１７貫目から２０貫目程あるそうで、その石の近くには、甕が２つあり、１つは法印様の甕。そしてもう１つの甕には旧の９月２９日に米を入れておき、翌年の４月頃に見に行き、そこで米の減っている方向が、作が悪くないと考えられています。

小国町には安産の神様として有名な大宮子易神社があります。

大宮、子易神社（大宮）

大宮神社は祭神大己貴命であり、和銅５年遠江国周智郡事任神社（一名小国神社）より当地（一説によると片岩）に勧誘し、「小国一の宮」とした。子易神社は祭神国常立尊、高皇産霊尊、神皇産霊尊、木華開耶姫命であり、もと小国神社と称した。元来、其の時々の領首より神封田５町８反２畝を賜わっていたが、永禄２年伊達家の臣上郡山がこれを廃した。（併し、小国大宮神主代々由緒書には、佐藤伊象守藤原家次（遠藤氏の祖先）が、永禄２年上郡山と心を合わせて大宮の神を再興す。と記してある）慶長三年（西暦１５９８年）上杉家の領土となったとき領主代々の祈願所と定められ、神田を寄進された。明治５年４月小国郷７２ケ村の鎮守に指定され郷社となった大正１０年７月２５日神饌弊帛料供進神社に指定された。

元来、子易とは産児の祈祷に起因するものであり、古くから安産の神として崇敬されてきた。礼祭は８月１８日（旧）である。

子易神社別の説（大宮）

一説によると東置賜都高安村の才の宮の由来より始まるとされており、高安村は山に取り囲まれた奥地なので、昔年貢を納めたことがなかったそうである。文徳天皇の天安年中（西暦８５７年～８５８年）にこの山奥に凄む古狸が都の役人に化けて、これまで久しく年貢を納めなかった代りであるといって、里の娘１１才を限りとし毎年春と秋に一人ずつ人年貢に取った。そのため村には娘が殆どいなくなってしまった。村の人々が嘆き悲しんでいる時、愛宕山の地蔵権現が座頸に姿を変えて現れ、国八代郡の南宮宝菩薩から、三毛犬、四毛犬を借りて悪魔を返除せよと教えてくれた。里人は役人に化けている狸どもを酒盛に招いて、たらふく酒を飲ませ、三毛犬、四毛犬に食い殺させた。しかし２匹の犬も傷を受けたので間もなく死んでしまった。里人は地蔵権現の教えに従って犬の屍をねんごろに林の中に葬り、その塚の上に椿を植え、小祠を建てて、犬の官子易聖真子両大権として村の鎮守に祀った。その祠の傍には庵を作り里の人々が代わる代わる宮守を務めた。それからというものこの宮の守護によって村には子どもがよく育ち、特に難産する者は一人もなくなったという。ある時、行脚の僧がこの庵に立寄ったので、里方のことを占ったところ「古狸の魂魄の念はまだ失せ切らない。この宮の威光によって成仏することが出来ないでいるから益々信仰を厚くしなければならない。」と申された。里人はこの僧の徳を慕って庵主になることを誓い。それから庵の名を林照院とつけた。犬の塚の上に植えた椿の木は年を経て成木となったので、庵主はその枝を切って愛岩山の地蔵権現と、三毛犬、四毛犬の両権現の像を刻み、一つの像は愛岩山に納め、二つの像は鎮守の森に安置した。そして信心怠りなく勤めたので、里人は僧に進めて妻を取らせた。それにより林照坊と号した。林照坊は子が成人し、都へ登って醍醐院で修験の法を学び吉野へも登山し峰中権行も努めようと思いたち、その身の守の本尊、一寸八分の聖真子権現の一体を笈に納め、それを背負い都を目指して旅立った。

その翌年、業を積んだ林照坊が帰国する時の出来事。越後路から大里峠を準えて羽前の小国（南小国）へさしかかった。日が暮れかけていたので谷深い集落に宿を求めた。その夜は激しい雨が降り、翌朝宿を出る時には雨はやんでいたが村はずれまでくると川があり、昨夜の洪水のために橋が流されていた。水は幾分引いていたので浅いところをねらい杖に頼りながら渡ったが、

近くまできた時、石に滑り杖の先についている宝珠を川の中へ落してしまった。その後峠にかかると、にわかに腹が痛んできた。我慢しながらもようやく人里まで下り宿を頼んだ。（その家は遠藤といって、いろいろ親切に介抱してくれた。）しかし病はいよいよ重く悪化をたどるばかり、林照坊は臨終の近づいたことを悟り、遠藤に自分の身の上を語り、自分の死んだ後は、笈の中の犬の宮子易権現を高安村に届けてくれるようにとだけ頼み、昨日川の中に宝珠を失ったことを話し間もなくこの世を後にした。

林照坊が宝珠を失った川をその後「珠宝川」とも「玉川」とも呼ばれていたが、玉川のほうが言いやすいので、後世まで玉川の名が残ったとされている。林照坊が死んでから間もなく遠藤の妻が産気づき、７日ほど痛み産むことができなく苦しんでいた。しかし林照坊との約束を果たすため遠藤はそれから早速、笈仏を高安村に送り届けようと出かけた。山を越えて４里ばかりきて、ある家の軒下に笈を置いて休んでいると、その家の中から人の泣く声が聞えてくる。その訳をたずねると、この家の１９歳になる一人娘が産気づき、７日も痛み続けていたが、ことのほか難産なので心身ともに疲れ果ててしまい、本人は死を待つばかりなのであるという。遠藤はこれを聞いて家に入り主人に仏の由来を話した。すると主人はとても喜び、身を清めて遠藤と共にこの仏に祈った。すると半時もたたないうちに安産し母子共に健康であった。さらに生まれてきた子はたまごのような白子であり、その後ここを白子沢というようになったと伝えられている。

人々は、このような奇持の笈仏を他国に譲るのはまことに惜しいと考え、永くこの山内に留めて、末世までも小国の守神にするようにと遠藤に勧めた。遠藤もそれに同意して、そこから仏を持ち帰り、自分の屋敷の内に祀った。ここの宮に懐妊を祈る者は皆安産するので、その仏の力は近郷、他国までも伝わっていった。と云われている。

産小屋の話（大宮）

大宮子易両神社に鎮座している大宮の土地は昔から聖地とされており、不浄なことは一切嫌われていた。それ故に出産の時も、隣の集落（増岡）の土地に建ててある産小屋（俗に小屋という）で行なわれている。昔は、ここの産小屋さえ不浄なものとして、常に建てて置くことが許されなかった。産のある度に村中の者が集って一定の場所に囲った粗末な小屋を建てて、産婦が帰るとすぐ取り壊していたが、時の小国警察分署長から従来の産小屋があまりにも不衛生なので常備のものを建てて置く様にという注意によって設けられたのが後の産小屋である。（６畳１間だけであった。）産婦は分娩してからここに２週間過して帰ることになっていたが、子易神社の守護によって難産したり、小屋にいる間に育児が死亡したりすることは、昔から一度もないそうである。ここの産小屋の汚れた火で調理したものは、産婦以外の者は飲食することは禁じられ、少しでも産小屋に入った者は、必ず塩で身を清めてから家に入るそうである。

小国町教育委員会の研修室にて聞き取り取材の一コマ

お使いの蛇の話（大宮）
大宮子易神社のお使いは蛇であり、その蛇は普通の蛇よりも尾が短く時々境内に姿を見せることがある。蚕が鼠に荒らされるとき、お使いの蛇を借りて守ってもらうことがある。お使いの蛇を借りるには、家を出たら途中一切人と話をしないで神社に行き、お使いを借りたい旨を心の中で申し上げ、手拭いで目隠しをし前に風呂敷を広げ、その中に入ってもらう様にお願いして静かにたたむ。それから日よけをつくり途中口をきかないで家に帰る。蚕室に入ったならば、また目隠しをして風呂敷をひろげ蚕のお守をお願いする。お使いの蛇を借りてきた期間は蚕棚の前に毎朝ご飯を供えなければならない。そうすることで不思議に鼠が来なくなるそうである。蚕があがったならば、借りてきた時と同様にお返し、お礼を申し上げなければならないそうである。

朝日連峰の麓に位置する北部地区。山岳信仰という点で調べてみると次のような話がありました。

天狗の角力取場の話（五味沢）
正月の１０日、この日は庄内の天狗、最上の天狗、米沢の天狗が、力くらべをする日とされている。前日から集まった大小無類の天狗どもによって、１０万８千俵の餅がつきあげられ、（１０８煩悩の数が関係と云われる）暗いうちから龍が岳で鳴らす太鼓が鳴りひびく。 あたりの山々は一面雪に覆われているがここだけはきれいに掃き浄められ、純白な砂があたり一面にまき散らされている。そしてこれから一年を支配する大天狗を選ぶ日がやってくる。定刻の１２時になると正面の一段高い所に、遠く鞍馬山から飛んできた天狗が行司として羽根のうちわを持ち控える。四本柱には南部の恐山、伯耆の大山、信州の浅間山、それから筑波山から馳せ参じた天狗達が座を占める。 庄内、最上、米沢の三方の道からこの日の代表に選ばれたおのおのの天狗が修々とあらわれ、凍るような月の下で角力とりをして一番勝ったものが一年間大天狗として君臨できるのである。たまたま、いたずら者が四本の柱の代りにつまれた石を散らかしておいても一夜のうちに元あったようにきちんと積み直されており角力取場はきれいに掃除されているそうです。さらに角力を取る時は必ず土俵の砂上に天狗の羽根あとが波状に付いて、夏になっても消えないそうです。 月夜の晩などに出谷川、見附川などの渓谷から集まってきた小天狗たちが砂原の土俵で遊ぶとされるこの場所は、現在は盤梯朝日国立公園になっています。今でも時々あたり一面に彼らの羽根あとが目撃されているそうです。（谷風の吹上げと峰を越えてくる風との衝突がもたらす作用と考えられています。）

担当の先生は以前山岳部顧問をしておられ話を伺うと、西村山郡大井沢中村から大井沢川に沿って、龍ケ岳に登り、天狗小屋、二ツ石山を越えて朝日連峰の横復にさしかかる大井沢口の途中に「天狗の角力取場」という地名があり、この場所は大井沢中村から徒歩約４時間かかり、天狗小屋のすぐそばに位置し、朝日連峰では数ある有名な展望台の１つだそうです。緑一面のハイマツに周囲をかこまれ、花崗岩のきれいな風化砂礫が敷きつめられ、まるで、本当にほうきで土俵の砂をはき浄めたかのようであるそうです。この光景を見ると「山土の土俵」と話が残る理由もわかるとおっしゃっていました。私たちも実際にその景色を眺めてみたいと感じました。

更に昔物語を調べていく中で、次のような話がありました。

三面の耳さがりの話（入折戸・折戸）

昔、三面（みおもて）集落の近くに大変恐ろしい山賊が住んでおりました。時々山々のさびしい所に現われては身ぐるみをはぎ取っては逃げ隠れし住んでいました。ひどい時には三面の集落に現われ三面集落の人々を大変困らせていました。集落の人々がいくら抵抗してみたところで相手は恐ろしい山賊。とうていかなう相手ではありません。集落の人達は、どうすることもなく泣き寝入りの生活を送っておりました。

そんなある日、折戸集落に住んでいる小池之助という武士がこの話を耳にしました。小池之助は今でこそこんな山の中に隠れ住んでいるが、平忠盛から血の流れを引く立派な平家の武士でした。「ようし、俺がその悪い山賊を退治してくれよう。」と小池之助は先祖から伝わる大事な刀を持って山賊の住み家に向いました。小池之助は山を探し歩いて、ついに山賊の住み家を見つけることができました。小池之助は山賊の家の前に立ち「こら、善良なる村人をいじめる悪い山賊。平家の血の流れをくむ小池之助が天に代わっておまえ達を退治にきた。」と大声でどなりつけました山賊たちは、この突然の出来事と１人で山賊の住家に向かって来たこの男に驚きました。「なにを。この若者、おれ達を誰と思っている。１人で退治できると思うなら俺たちを退治してみろ。」と槍や刀などの武器を取り小池之助に向ってきました。しかしいくら強い山賊といえど、小池之助は立派な強い武士、かなう訳はありません。小池之助は山賊を全部切り倒しました。そして山賊を退治した証拠にと山賊の耳を切り落とし近くの木にぶらさげてきました。小池之助は集落に帰ってきて「村の衆安心せい。山賊は俺が１人残らず退治してきた。」と山賊退治の一部始終を伝えました。

しかし、集落の人は「あの恐ろしい山賊をまさか？１人で退治できる訳がない。」と誰一人として本気で聞いてくれる人はいませんでした。そこで小池之助は、嘘だと思うなら山賊の住家にいってみろ。俺は山賊を退治した証拠に山賊の耳を切り落とし木にぶらさげてきた。」と言いました。集落の人々はまさかと思いながらも小池之助の言う住処に行ってみると、彼の言う通り本当に耳がぶらさがっていたそうです。

それ以後、その場所をみんなが「耳さがり」と呼ぶようになったと云われています。小池之助はそれ以後集落の人々から尊敬されるようになりました。そして三面集落の人々からは集落を救ってくれた人という事から集落、三面の長として迎え入れられました。そして小池之助は一生そこで暮らしたということです。そしてこの小池之助は現在三面集落の小池家の先祖であるとも云われている。

三面集落（新潟県）の山賊の話が出てきました。そこで山賊のいるような深い山を越えての交流があったのではないかと考えてみました。そこで峠道を調べてみたところ。今は廃れてしまったそうですが北部地区からは「村上へ通ずるルート」「長井へ通ずるルート」という２つの峠ルートがあることがわかりました。そしてその街道はそれぞれ「柳生戸街道（村上ルート）」「西山街道（長井ルート）」と呼ばれ、特に柳生戸街道は、俗に【塩の道】と呼ばれていることもわかりました。

小国には主要道であった越後街道（１３峠）というものがあります。（昨年のレポートで現地調査をした道もその一つ）その支道の役割があったのか？昔の村上城から見ても小国町北部地区は方角では東側にあたり、米沢に渡る場合、現在のルート（国道１１３号線）よりも直線上に位置し距離的にも短縮され都合がいいように思えます。この街道はどのように開拓され、そして衰退してしまったのかを次に詳しく調べてみようと考えました。

（３）北部の街道

１柳生戸街道（やなぎよど）

今年学校のＰＴＡ会長をなされている髙橋義彦さんが北部地区にお住まいということで北部の歴史に詳しい安部文雄さんをご紹介していただきました。安部さんは昔から北部の長沢にお住まいで、家の土から見つかった刀を始め歴史的遺産を所有されている方でした。お話を伺う際に当日は安部さんのお知り合いである、小国の歴史を調べられている増田剛雄さんにも参加していただき塩の道について北部地区のコミニュティセンターで詳しくお話しを伺いました。

北部地区の歴史の聞き取り風景

安部文雄さん宅に代々伝わる古文書を見せていただきました。
関所を越えるに必要であった、江戸時代の寺手形（左）とその訳（中）
そこには北部地区の寺の住職をされていた方の名前が記載されていました。

なお古文書の表紙には紙の補強や虫除けという目的から、ウルシが塗られていました。
北部の五味沢地区はウルシが多く取れ会津塗（福島県）と時期を同じくしてウルシを施した木地づくりが盛んであったことをお聞きしました。一時期、途絶えてしまったのですが、地元の方のはたらきかけで、地区には「※白い森木工館」と呼ばれる木工体験ができる施設ができました。

※白い森・・【小国町の木、ぶなの白い木肌】【冬の白い雪】からイメージして付けられた愛称。小国町では「白い森〇〇〇」という施設が多く存在します。

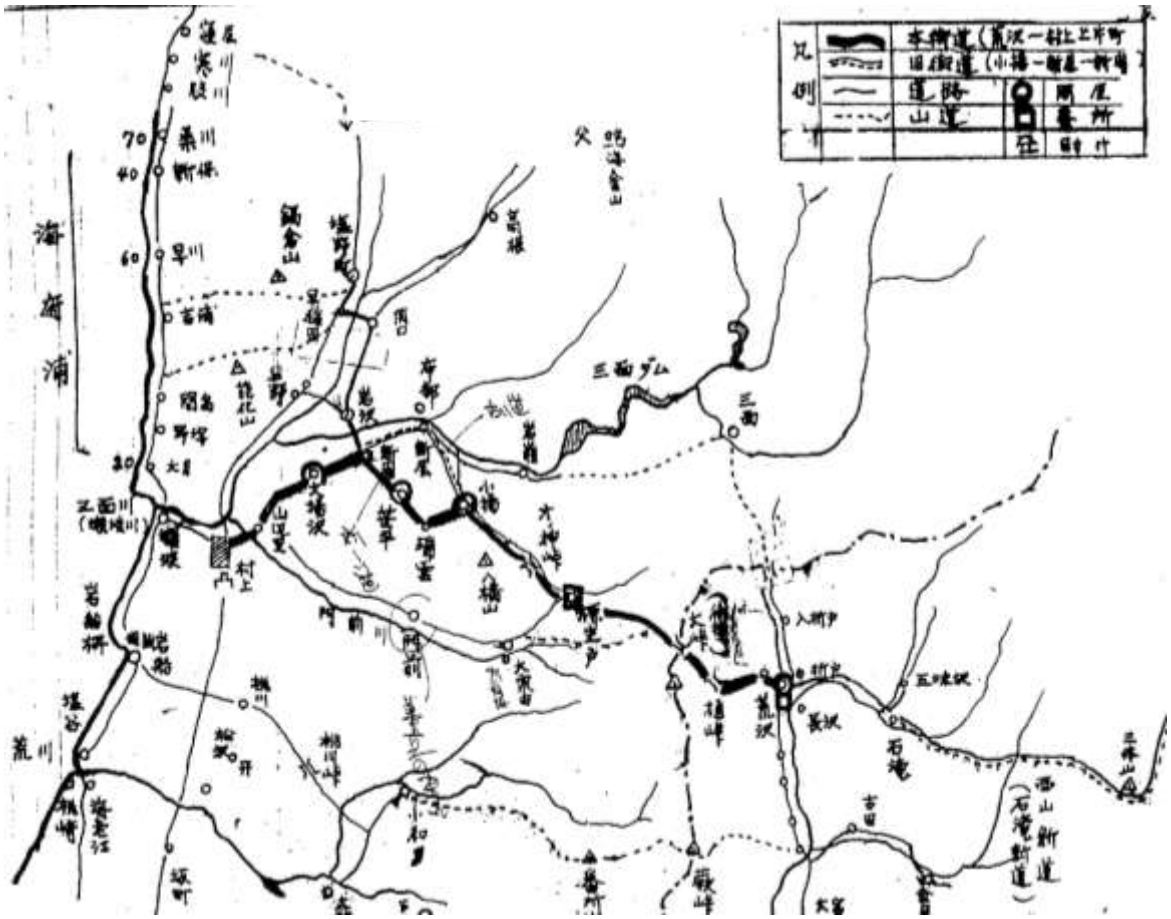
小国を経由する主な街道（柳生戸街道（左上）石滝新道（右上）越後街道（下））

山形県の交通史　より

柳生戸街道（新潟県村上－笹平－小揚－柳生戸－大峠－相平－小国町荒沢）

柳生戸街道は俗に「塩の道」と呼ばれていました。「塩の道」とは新潟県村上から塩や海産物、山形県小国側からは米沢藩から引き継いだ煙草などの交流があったことからこの名がついたといわれています

六ヶ字地区塩の道保存協議会資料より



県境に位置し戦前には往来が途絶えたこの柳生戸街道を調べるために、平成２年に小国町・朝日村の方々が集まって「いにしえの道・柳生戸保存協議会」を設立、町内の渡部徳太郎教育長を講師に招き「塩の道サミット」と称し村人が集まり勉強会も開催し、調査団（小国町側踏査団）も結成し調査を行い、その後は定期的に修復活動を行っているそうです。

柳生戸街道付近の絵図

番所	慶安３年（西暦１６５０年）には 玉川・上荒沢など１２か所あった
助け（救助小屋・避難小屋）	相平と呼ばれる場所に設けられ 季節的に主に冬に利用された。スノー小屋
問屋	江戸時代、宿場で人馬の継立をした事務所 牛宿・旅人宿を兼ねるものも多かった。
大峠	標高６５９メートル「お境」と呼ばれていた （国境ではなく・地形的見地から）
道陸神（どうろくじん）・道祖神	交通不便な時代、旅人の安全を守る神。 村端・分かれ道・橋などに祀られる。

いつ造られたかは定かではありませんが、江戸時代荷役を行った場所として荒沢の地名があることから

「荷改ヲ行ツタ番所ハ十二ヶ所デ玉川上荒沢ノ名ガミエル。」（慶安３年　上杉綱勝の時）

３６０年ほど前には交通の要所で村上藩と米沢藩の物資を結ぶ交易ルートではなかったかと推測されています。

峠道はまったくの山道で険しい場所では「１７曲がり」と呼ぶ坂があります。人が通るだけなら曲がりはこんなに必要はありませんが馬を連れて歩く為（馬だけでなく牛も通っていた記録がある）に多く設けられ傾斜を緩くしているということでした。標準的な荷の持ち方は背中に一俵、両脇に一俵ずつの計３俵分の荷を持ち、峠を行き来していたそうです。樋ノ峠と呼ばれる山には道陸神（どうろくじん）が祀られてあり、山に入る際そこに１本の木の葉を置き、帰りにそれを回収する。現在何人が峠を通っているのか？無事下山したのか？などがわかる仕組みになっていて、いわば現代版、登山者名簿的な役割も果たしていたそうです。その他途中には馬や牛がのどを潤すための水をためていた直径５～６メートルほどの穴があったそうです。

新潟県との交流があった名残として今も益田・原田・斉藤家の一族が残っているといわれ、問屋という屋号のもつ家は、そこで品物を取り次いだ事にちなんで名付けられたそうです。さらに当時の村の仏壇のほとんどは村上で作られたもので、街道を人の背に乗って運ばれてきたといわれています。

現在の塩の道街道小国側登り口。行く途中には「熊出没注意」の看板を多く目にしました。

廃道となった原因は「米坂線」が今の場所に引かれたことが影響していると考える方が多く（塩の道ルートに旧国鉄（現ＪＲ新潟坂町駅⇔山形米沢駅線）を通す計画もあった）開通後、目に見える形で人の交流を含む物の流れが大きく変わったそうです。「道路も沿線に発達し塩の道はその役割を終えてしまった。」とお聞きして少し悲しい気持ちになりました。もし鉄道がここを通っていたなら、それに沿って車道ができ、民家や商店が増え、人の動線が変わり、現在より良くなっているのか、悪くなっているのかは想像がつきませんが、今の小国町は大きく変わりずいぶん違ったものになっていた事でしょう。クレオパトラの鼻の高さの話の様に町づくりの基盤となる土地の整備というものは、次世代に渡り住人の生活に大きな影響を及ぼすという事実。土地改良という公共事業を進めるには発展・町おこしなどのメリットと、その管理・維持、そして今は地球への負担も考慮し将来を見据えた考え方が必要だと強く感じました。

柳生戸で運んだとされている物資

米沢方面へ運ばれる荷を「上り荷」、越後方面へ運ばれる荷を「下り荷」と呼んだ。

・上り荷は　塩、鉄、肴（魚）類、茶などの海産物。

・下り荷は　青苧、たばこ、ローソク、灰荷　などであった。

<table>
<tr><td>塩</td><td>・日常的な必需品である塩は当時作るのが非常に難しいものであった。
・製塩の際、火を燃すに使用する大量の木材は、山から刈り、川を堰き止め、水量を増させた川に流し瀬波の方へ運んだ。
・海府浦の製塩法は独特で釣釜式と呼ばれるものであった。
・慶応２年の塩の税金（瀬波郡絵巻）より
<table>
<tr><td>製塩所</td><td>桑　川</td><td>新　保</td><td>早　川</td><td>大　月</td></tr>
<tr><td>税　金</td><td>７０俵</td><td>３０俵</td><td>６０俵</td><td>２０俵</td></tr>
</table>
</td></tr>
<tr><td>鉄
（御用鉄）</td><td>・大部分は越後街道（１３峠）を輸送した（天保５年の文書）がこれ以前は柳生戸街道（大峠）も利用された。
・鉄は、米沢藩では専売制で、他の諸藩と同様、自由販売は認められなかった。「御用荷物」として厳重に取り扱われた。米沢城下と小国に藩の鍛冶屋が置かれ、農具や刃物が作られた。</td></tr>
<tr><td>魚
（秋味）</td><td>・乾魚・塩魚に加工し村上からの他出の８割を米沢領へ輸入、幕末の米沢藩の台所を潤したとされている。</td></tr>
<tr><td>茶
（村上茶）</td><td>・村上茶は茶の北限といわれていた。
・起源　村上上町徳光屋土田覚左エ門　元和元年（西暦１６２０年）伊勢参宮に行き宇治の茶の木を見て種子を持ち帰ったといわれている。
・（宝永元年（西暦１７０４年）９月２２日の書付）より米沢領内へ輸入。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td>青苧
（苧麻・からむし）</td><td>・庶民の衣料の原料として古くから栽培される。
・下長井地方　特に白鷹地区（箕和田・萩野・十王・畔藤）が盛んであった。</td></tr>
<tr><td>たばこ</td><td>・米沢にたばこが伝わったのは慶長１５年（西暦１６０５年）とされる。
・当初は医療効果があるとされた。
・鷹山公の国産奨励（米沢里人談）</td></tr>
<tr><td>灰荷</td><td>・織物の染料の際、使用する。
・新潟は山辺里織（さべりおり）山北科布（さんぼくしなぬの）五泉平（ごせんひら）など織物が有名で良質な水と生糸となる繭の生産に恵まれている。</td></tr>
</table>

数年に１度峠の下刈りが行われ、今年は実施年であることをお聞きし、７月下旬に行われる下刈り日にあわせ私たちも参加させていただこうと準備をしていましたが、今年は例年以上に熊の被害が多く、多数目撃もされていることから私達には危険と判断し断念しました。残念でしたが機会を見つけ、いつかみんなで歩こうと話し合いました。塩の道からはルートが外れるのですが三面にはダムがあり、そこまでは未舗装ながらも小国側から車で行くことができるとの事でした。

2　西山街道（西山新道・また小国では石滝新道と呼ぶ場合がある）

小国から朝日連峰を挟んだ東側に位置する長井市があります。そこはかつて最上川の舟運で栄えた町でありました。

慶応２年（西暦１８６６年）この年、幕末の世情不安に追い討ちをかけるような凶作であり、物価が高騰していました。

「諸品ますます昇り、新米一俵１９貫５百文ぐらい。中折（なかおり）１帖４５０文。品物によっては４倍より１０倍ぐらい。値段を聞いてためいきをつき、目玉をきらめかし、ただそっとしばらく立ち見るばかりなり。」　「歳々風雨物直咄集」より

そんな中、酒田（庄内）から左沢（あてらざわ）まで最上川の航行権を握る酒田の商人達は、足元を見るかのように船賃の値上げを要求しました。

増銭として１００両相当の品に４両２分（４．５％）の手数料　「長井市史」より

それに対し、長井の商人は怒り心頭、別ルートを模索したとされています。

物資を越後の瀬波港へ降ろして、そこから陸路で長井（小出）に輸送する。そして将来は山形や仙台方面への貨物輸送の中継ぎ基地にしようという案を出しました。「小国まで行けば瀬波まで柳生戸街道（塩の道）があり、長井（小出）からは明神平（野川の奥）までも道はある。あとは明神平から小国（石滝）までの道を開拓すればよい。」と、長井の商人たちは自費で切り拓きました。

手続きに藩の許可（幕府の承認）を得る際、当時の幕府としては幕府の危急存亡が目の前の問題であったためか、幕府は「好きな所へ、好きなように作れという異例の返答であった。」とされています。（ただ投げやりではなく、藩からも協力は得ていたようです。）

ただ、会談所（六老の詰所）・御金蔵（一藩の現金の出納及び管理にあたる）・御役所（役所役と称し奉公の下にあって藩全体の庶政を司る）に対し、三ヶ村（下長井・小出・成田）より願い出た開鑿という大業に対して各所協力して時折出勤して、万端手落ちなく。と指示し小国役屋にある蔵米の払米１００俵のうち、９７表（米代と駄賃分を合わせ１８５１貫３５文に相当）を新開人足の夫食分として与え、さらに１０月には出勤役人の賄料４１８貫２９０文と御手当銭２５０貫文を金蔵より小出村の元方に支払う。

「長井市史」より

米沢藩にとっても、経済的・軍事的な重要性があったということでしょうか。

・工事は慶応３年（１８６７年）（雪解け後の４月着工）５月～８月
・総工費３１４５４貫文余りそれでもなお２５４貫文余の現金が残った
・工事人夫（土工）述べ１５２００人　村方人夫（百姓）約４０００人

助け小屋の解体中に下敷きになり亡くなったものもいた。その時香典として金三両が送

られたとの記録がありました。（時価にして米一俵とされています。）

「新道御普請諸入料、金銭受払総目録」より

また、この時、山形城下きっての豪商で山形藩の御用達商人をも兼ねる長谷川吉郎次が新道開削に元手を出すという話もあったが、他国より元手を受け取っては、将来に必ず禍根を残すということで、これを断った。と記している。　「歳々風雨物直咄集」より

新道は小出を起点として全行程約６４キロそのうち、改修すべき区間は「入野川－明神平－折草－蛙沼－姥獄－三体の腰（三体山）－二本木－三体裏－丸山－篠平－金目川－石滝山－石滝川石滝元村－五味沢－荒沢」でおよそ２４キロにも及んだ。

入野川から明神平までは山道の手直し・石滝村から荒沢までは従来の道の曲がりを直し、幅を広げる。一部改修工事のような箇所もあった為「古道相開」と記されているものもある

初めに開削工事の基地となる夫陣小屋や新開小屋が、折草・婆獄・笹平・金目川・石滝村の５か所に作られ、最上方面からは新開頭として６人が迎えられた。

工事の人足は下長井と小国方面から、すべて有償で集められ、従事した作業の難易によって日料の代銭が与えられた。

また要所に荷物をつけた牛の交換ができるように「牛除場（うしよけば）」（待避所）を５５か所、橋は新たに８か所架けられ、「助け（救急小屋）」も三か所（二本木・金目川・石滝山）設置され、無事新道は開通した。

下長井川柳の第三世を継いだ緑庵加藤雅外の書いた「西山新道細見」が次の絵図です

（武田清五郎氏（小出）・佐々木嘉兵ヱ氏（成田）蔵）より

西山街道の鳥瞰絵図１（石滝山（右）～五味沢（左）までの道のり）次頁との続き絵を２分割

西山街道の鳥瞰絵図２（五味沢（右）～荒沢（左）までの道のり）

西山街道の鳥瞰絵図３（長井側から小国側を望む　三体山（上）～入野川（下）の道のり）

西山街道の鳥瞰絵図４（小国側から長井側を望む　二本木（右上）～金目山（下）の道のり）

「新道は宮・小出から平山村に至り、入野川から急坂を明神平（この間１里）に登り、ここで中村あるいは大平からの道に合し、明神平から下り坂を折草におち、再び登り坂を蛙沼の脇を通って、三体山の裏側にある二本木（明神平・蛙沼　間１里、蛙沼・二本木　間１６丁）に出て二本木から丸森・丸山・篠平・中平・逢平を下って金目川の橋（二本木・金目川橋　間２里半３丁）に金目川の橋からの登り道を行き金目山を越えて石滝山（金目川橋・石滝山間２２丁）に出て、下り道を石滝川の橋（石滝山・石滝川橋　間３４丁）に至り、ここから平地で石滝・五味沢・五味沢川橋・太鼓沢・焼山を通り荒沢の関所（石滝川橋・荒沢間２里）に着く。荒沢からは樋の峠を越え柳生戸を通り村上まで９里の道のり」と記録されています。

しかし完成から２ヵ月後の慶応３年１０月、時の将軍徳川慶喜は大政を朝廷に奉還し、徳川幕府は終わりを告げる。

年を越した明治元年（西暦１８６８年）戊辰（つちのえたつ）の年、薩摩・長州を中心とする官軍は正月３日の鳥羽・伏見の戦い旧幕軍の討伐に乗り出し、ついに戊辰戦争となり東日本全体を巻き込んでいきました。４月に江戸城を無血開城、５月に幕府方の残党を上野の山で壊滅させた官軍は、新政府の威信をかけ、奥羽列藩同盟を結び、異を唱える新潟を含む東北諸藩に差し向けました。もはや賊軍となった東北諸藩に力はありません。

そんな時、村上方面に進出していた米沢藩の敗走の報とともに、ある噂が流れた。「官軍の総大将、西郷隆盛が、西山新道から攻めてくる。」 人々は慌てて行く手を遮るため、土手を築き、西山街道に架かる橋を落とし、大木を切り、道をふさぎ官軍の来襲に備えました。

明治元年８月２８日、米沢藩は降伏した。結局官軍は西山新道を通らず、越後街道（十三峠）を通って米沢に入ったそうである。

米沢藩は奥羽越列藩同盟を形成する雄藩として、北越に軍兵を派遣して官軍と対峙したが戦いに利なく大敗し退却せざるを得なかった。８月１１日官軍は村上や関方面に進出し、その先鉾は沼の手前にある榎木峠まで迫っていた。翌日１２日には榎木峠において両軍の間に合戦が行われたが、米沢藩はここでも敗れ、さらに後退し国境の大里峠に最後の守備陣地を構築した。

更に「歳々風雨物直咄集」の著者である新野伊三太氏はこの時、金目川の番兵を勤めていた。このことを次のように記録しています。

２２日には、総督千坂高雅が金目川に宿して、金目川の番兵に酒４升を与え、新道通りを巡回して諸陣地の番兵を激励。また２５日には世子茂憲が小国玉川から金目川に廻ってきて、新道の番兵を励ましている。世子一行はその日、平山村の天神寺に宿泊する予定であったが米沢からの早駕籠に接し、急ぎ明神平から大平を通って萩生村（現飯豊町）に下り、夜通しで米沢に向かった。

これは官軍からの降伏勧告書が米沢藩の手に渡されたことによるものではないかと推測されています。

明治に入ってからは宇津峠の開削を始めとする新越後街道の開通により西山街道は存在価値がなくなり、実用に供さることもなく、雑草の生い茂る山野に戻りました。それでも明治から大正にかけてはかろうじて道形をたどり新道を石滝方面に向かうこともできたそうですが、大正の末頃からは通る人もいないまま荒廃していったそうです。

この西山街道がもし明治の時代に十分利用されて縦貫道路としての面目を保つことができたのなら、小国だけではなく長井の町並みも変わっていたかもしれません。

（４）物資の輸送

１陸の輸送

当時の物資もしくは人を輸送する陸の経路と川の経路を探ってみました。

長井の商人は左沢周りの舟運を主に利用していた。その他に積荷を新潟・村上で陸揚げし小国経由（越後街道）で運ぶ方法もとられていたが、この道は牛馬駄送の上では、道幅が狭く、数多くの峠（十三峠と呼ばれるゆえん）などの難所が続き、大量の荷物を運送するとき際は不便で輸送費も決して安くなかったといいます。当時の輸送費はいくらだったのか調べてみました。

運べる量		
伝馬（てんま）	４０貫目	幕府領主の公用。無賃。
本馬（ほんま）	３６貫目 ～４０貫	公用及び諸大名が、定賃銀で使用する馬。 主として荷を付けて運ぶ馬。
軽尻 （からじり）		人が乗って荷を付けないもの。５貫目までの荷は許された。 人を乗せないときは、本馬の半分２０貫目までの荷。
乗懸 （のりかけ）		人が乗って荷物を付けたもの。 荷物は２０貫目まで。賃銭は本馬に同じ。
人足（背負子）		人が背負い運ぶ。荷物は５貫目（約１９ｋｇ）まで。超えれば目方に応じて払う。
慶長６年（西暦１６０１年）の定書より、伝馬荷物は１駄３０貫目、駄賃荷物は１駄４０貫目。 寛永２年（西暦１６２５年）には伝馬も駄賃馬も１駄４０貫文と定め、長く駄送の基準となる。		
※　当時、荷を運ぶ馬を【駄馬】といい、運賃を取って輸送する駄馬を【駄賃馬】と呼び、それを職業とする人を【駄賃馬稼】と呼びました。また、【伝馬】とは幕府領主の公用をこなすために宿駅で馬を乗り継ぐ馬のことを指しました。		
※　通貨と質量の単位に当時「貫」を使用し、その際、単位を区別にするために質量単位は【貫目】・通貨単位は【貫文】としていた。（明治時代に１貫目は３，７５ｋｇと定義）		

以下は越後・米沢間輸送の際、当時主要道であった越後街道（十三峠）の記録です。

宿と宿の間の賃銭は、それぞれ定められていました。

延享３年の覚書（井上清右ェ門）より

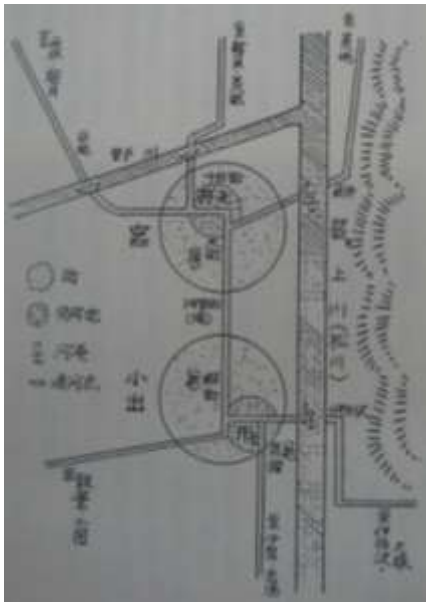
区　間		米沢 ～ 上小松	～松原	～ 手ノ子	～沼沢	手ノ子 ～ 白子沢	沼沢 ～ 市野々	白子沢 ～ 市野々	～小国	～玉川
距　離		３里 １２丁	１里 １９丁	３０丁	２里 ２０丁	３里	１里 ３０丁	１里 １４丁	２里 ２３丁	２里 ６丁
駄賃 （文）	本馬	１３８	６８	３２	１７５	１９３	１３３	１１５	１５５	１６４
	軽尻	９２	４５	２２	１１６	１２９	８９	７５	１０３	１１０
	人足	６９	３４	１１	５９	６５	４４	３８	５２	５５
※　駄馬輸送の困難な冬季は、背負子（しょいこ）による以外なかったとされています。										

米沢から小国まで本馬で４０貫目（１５０ｋｇ）の荷物を運ぶとすると（網掛け部の和）７０１文となる。文政年間（１８１８～１８２９）の記録で１文が約１２円。８、４１２円　となる。

２川の輸送（舟運）

最上川上流の舟運（左図）は、元禄年間の舟路開削で発達しました。左沢（あてらざわ）もその一つで、そこには米沢舟屋敷（陣屋）をおきました。米沢藩の領内である最上川（当時は松川と呼びました）にも同じように陣屋・宮陣屋を設けました。糠野目（現高畠町）には陣屋はありませんが、米沢盆地内で川船が発着できるようにと整備はされました。なぜならそこは山形・上山方面に通じる米沢街道と交る場所で、米沢から松川舟運を利用するには最も近い所。という理由からです。しかし、水量の豊富な時期は限られていたため荷物の揚げおろしだけで川岸場商人の発達はほとんど見られなかったといわれています。

一方、松川の川岸として最も栄えたのは長井の宮・小出の舟場でありました（右図）。ここを流れる松川は、飯豊山から流れる白川と朝日山系の野川が合流し当時から水量も豊かだった事が影響し宮・小出は物理的にも経済的にも長井盆地の中心となったため、早くから長井を中心に６本の主要道が造られました。そこを起点として放射状に出ているその交通体系は現在も変わっておらずバス路線もこれによって編成されています。



・長井（最上川渡河）東山山麓経由　荒砥
・長井（野川渡河）成田　鮎貝（最上川渡河）荒砥
・長井（野川渡河）勧進代　鮎貝
・長井（最上川渡河）伊佐沢（最上川渡河）大塚
・長井（白川渡舟）今泉（最上川渡舟）赤湯
・長井　平野　飯豊　小国

当時たいていの物資は、荒砥舟場で積み荷を降ろし、翌日宮舟場で酒田からの送荷や、荒砥方面からの委託品を積んで帰村したといわれています。その後明治以降は道路の改修・新設、荷車の出現で明治２０年代に高畠・南陽方面からわずかの建築用石材運搬が主となり荷船は姿を消していきました。

明治１２年の舟運の賃銭　　（山形県史）より

渡しの名	川の名	区間	用幅	渡銭（人・馬）
荒砥	松川	石那～鮎貝	４０間	６銭・８銭
小出下	松川	小出～森	３５間	５銭・７銭
小出上	松川	小出～伊佐領	４５間	５銭・７銭

調べていくにつれ、当然のことなのですが、今と変わらず昔もサービスに応じての対価が変動し、その中で身分相応の生活をしていたということが実感でき、そこで商売する商人と客との値切りなどの掛け合いもあったのかもしれないと考えると想像が膨らみ、とても楽しいものでした。

天明後の米一俵の価格表

「米に換算すると、」という表記が頻繁に出てきます。感覚を掴むために時代の価格を表にまとめてみました。新野伊三太「物資咄集」を参考に、明治以降のレートと記事を追加しました。

天明元年		金１７銭	１３年		金２０銭
２年		金１６銭	１４年		金１８銭
３年	天明の大飢饉	金２２銭	文政元年		金１６銭
４年		金２０銭	２年		金１３銭
５年		金１８銭	３年		金１２銭
６年	大雨洪水	金２２銭	４年		金１３銭
７年		金１７銭	５年		金１４銭
８年		金１６銭	６年		金２１銭
寛政元年		金１５銭	７年		金２６銭
２年		金１２銭	８年		金１８銭
３年		金１５銭	９年		金１６銭
４年		金１５銭	１０年		金１９銭
５年		金１５銭	１１年	越後地震	金３６銭
６年		金１６銭	１２年	江戸大火	金３９銭
７年		金１８銭	天保元年		金３０銭
８年		金１７銭	２年	総人口２７２０万	金３０銭
９年		金１５銭	３年	全国飢饉始まる	金３８銭
１０年		金１５銭	４年	天保の大飢饉	金２５銭
１１年		金１５銭	５年		金３０銭
１２年		金２６銭	６年		金３７銭
享和元年		金１７銭	７年	諸国飢饉	金６０銭
２年		金１６銭	８年	大塩平八郎の乱	金２８銭
３年		金１６銭	９年	佐渡百姓騒動	金３４銭
文化元年		金１２銭	１０年		金３６銭
２年		金１５銭	１１年		金２８銭
３年		金１４銭	１２年		金３０銭
４年		金２１銭	１３年		金３５銭
５年		金１４銭	１４年		金２５銭
６年		金２０銭	弘化元年		金２９銭
７年		金１０銭	２年	米騒動	金５０銭
８年		金１４銭	３年		金３５銭
９年		金１４銭	４年		金３８銭
１０年		金２１銭	嘉永元年		金３５銭
１１年		金１６銭	２年		金４７銭
１２年		金１６銭	３年		金６７銭

４年		金４６銭	２２年	山県内閣	２円

５年		金４６銭	２３年	教育勅語	２円
６年	ペリー来航	金４７銭	２４年	松方内閣	３円６４銭
安政元年		金４０銭	２５年	伊藤内閣	２円２８銭
２年		金２８銭	２６年		３円６６銭
３年		金３２銭	２７年	日清戦争	３円６６銭
４年		金５１銭	２８年		４円
５年		金５５銭	２９年	松方内閣	３円７２銭
６年		金６７銭	３０年	伊藤内閣	４円１６銭
万延元年	桜田門外の変	金７９銭	３１年	大隈・山県内閣	３円２８銭
文久元年		金６５銭	３２年		４円
２年		金５６銭	３３年	伊藤内閣	３円７６銭
元治元年		金７８銭	３４年	桂内閣	３円７６銭
慶應元年		１円４２銭	３５年		４円９６銭
２年		１円９４銭	３６年		４円３６銭
３年	江戸幕府滅亡	１円４６銭	３７年	日露戦争	４円３６銭
明治元年		１円６９銭	３８年		５円２８銭
２年		３円４３銭	３９年	西園寺内閣	５円２８銭
３年		１円８７銭	４０年		４円７２銭
４年		１円１２銭	４１年	桂内閣	４円９２銭
５年	初の鉄道開通	８０銭	４２年		４円
６年	地租改正	１円２０銭	４３年		５円３６銭
７年		１円８７銭	４４年	西園寺内閣	６円１６銭
８年		２円　５銭	大正元年	桂内閣	８円３２銭
９年		１円１８銭	２年	山本内閣	８円３２銭
１０年	西南の役	１円３４銭	３年	大隈内閣	７円２８銭
１１年		１円９２銭	４年		４円３７銭
１２年		２円６４銭	５年	寺内内閣	５円５２銭
１３年		４円８０銭	６年		６円
１４年		３円２８銭	７年	原内閣	８円４８銭
１５年	日本銀行創立	２円　８銭	８年	戦争米騒動	１０円６０銭
１６年		１円２５銭	９年	人口５５００万人	２０円
１７年		１円８４銭	１０年	高橋内閣	１４円２０銭
１８年	内閣制度始まる	１円７３銭	１１年	山本内閣	１０円２０銭
１９年		１円５５銭	１２年	関東大震災	１０円４０銭
２０年		１円４６銭	１３年	清浦内閣	１５円３０銭
２１年	町村制施行	１円４２銭	１４年	加藤内閣	１３円６０銭

昭和元年	若槻内閣	１２円７０銭	３８年		５０３０円
２年	田中内閣	１０円８５銭	３９年	新潟地震	５７７５円
３年	金融恐慌	１０円６０銭	４０年		６３０８円
４年	浜口内閣	１０円４０銭	４１年		７０２０円
５年		６円２８銭	４２年		７６７７円
６年	若槻・犬養内閣	６円５０銭	４３年		８２０８円
７年	満州事変	８円２０銭	４４年	自主流通米制度	８２１８円
８年	５・１５事件	１０円８０銭	４５年	減反騒動	８２１８円
９年	岡田内閣	１４円８０銭	４６年		８６３１円
１０年		１０円９０銭	４７年	田中内閣	９０３０円
１１年	広田内閣	１１円８０銭	４８年		１０３９０円
１２年	林・近江内閣	１２円９０銭	４９年		１３７０２円
１３年		１３円４２銭	５０年	三木内閣	１５６１２円
１４年	平沼・阿部内閣	１６円３５銭	５１年		１６６１３円
１５年	米内・近衛内閣	１６円３０銭	５２年	福田内閣	１７０８６円
１６年	大東亜戦争	１６円５０銭	５３年		１７１７６円
１７年		１６円９０銭	５４年	大平内閣	１７１７６円
１８年		１８円４２銭	５５年	鈴木内閣	１７５３６円
１９年	小磯内閣	１８円８０銭	５６年		１７７５６円
２０年	鈴木内閣　終戦	６０円	５７年	中曽根内閣	１７９５１円
２１年	吉田・片山内閣	２２０円	５８年	日本海中部地震	１８２６６円
２２年	芦田内閣	７００円	５９年		１８６６８円
２３年	吉田内閣	１４８７円	６０年		１８６６８円
２４年		１７２５円	６１年		１８６６８円
２５年		２０６４円	６２年		１７５５７円
２６年		２８１２円	６３年	竹下内閣	１６７４３円
２７年		３０００円	平成元年	海部内閣	１６７４３円
２８年	鳩山内閣	３２８０円	２年		１６５００円
２９年		３６４８円	３年	宮沢内閣	１６３９２円
３０年		３９０２円	２００４年に食糧法が改正され政府米以外はすべて民間流通米となりました。日本は外国からのお米に高い税金をかけ、外国輸入されたお米を売れにくくしています。これを「関税」といい、２００４年には４９０％の関税が適用されたということでした。 私たちの口に馴染んだかけがえのない日本のお米を守る為、安全でおいしいお米を作る努力をされている農家の方々を助けるような仕組み作りをこれからも努力していってほしいと思いました。		
３１年		３９９５円			
３２年		３８５０円			
３３年		３９６０円			
３４年		３９６６円			
３５年		４１１７円			
３６年		４２８９円			
３７年		４８８２円			

街道の高度差表を書く

実際に現地を歩くことが出来なくなりましたので、せめて高度差表をつくり街道を実感したいと思いました。　以前山岳部顧問をされていた先生にお聞きしました。（机上登山と言っておられました。）

ⅰ 実際の道（歩く場所）を地図上で確認する。

ⅱ その行程を直線に近い形で細かく区切り、番号をつける。

ⅲ その行程の地図上の距離をギルビメーター（地図用メジャー）で読み取り、表に記入する。

ⅳ その行程の標高を地図上から読み取り、表に記入する。

ⅴ 実際の距離を公式に当てはめ計算し、表に記入する。

ⅵ グラフ化する

【ポイント】

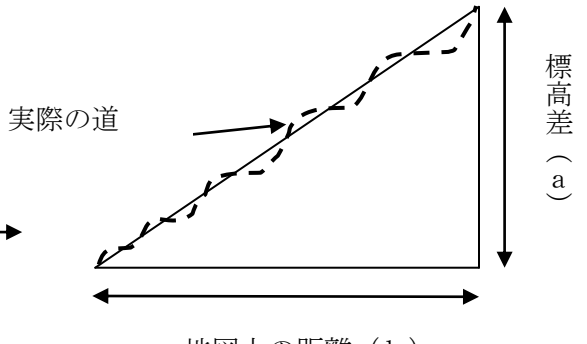
・ 地図上の距離には高さが含まれていない為、標高差がある本来の道では地図上の距離よりも長くなるため、地図上の距離と標高差の数値を計算し実際の距離を出す必要がある。

・ 細分化するほど正確さが増す。アップダウンがあればそこでも区切る。

・ 地図上の距離は同じ標高での移動距離しかあらわしていない為「※」の計算が必要。

・ ２５０００分の１であれば１実線１０メートルの間隔である。

※



「地図上に距離」を底辺に
「標高」を高さにした三角形を作る
斜辺上の距離を求めるには
ピタゴラスの定理を当てはめる。
実際の道はでこぼこしているので
直線距離よりもいくぶん長くなる
これを（経験上）約１．２倍とみる。

$$実際の道（距離）＝\sqrt{標高差(a)^2＋地図上の距離(b)^2}\times 1.2$$

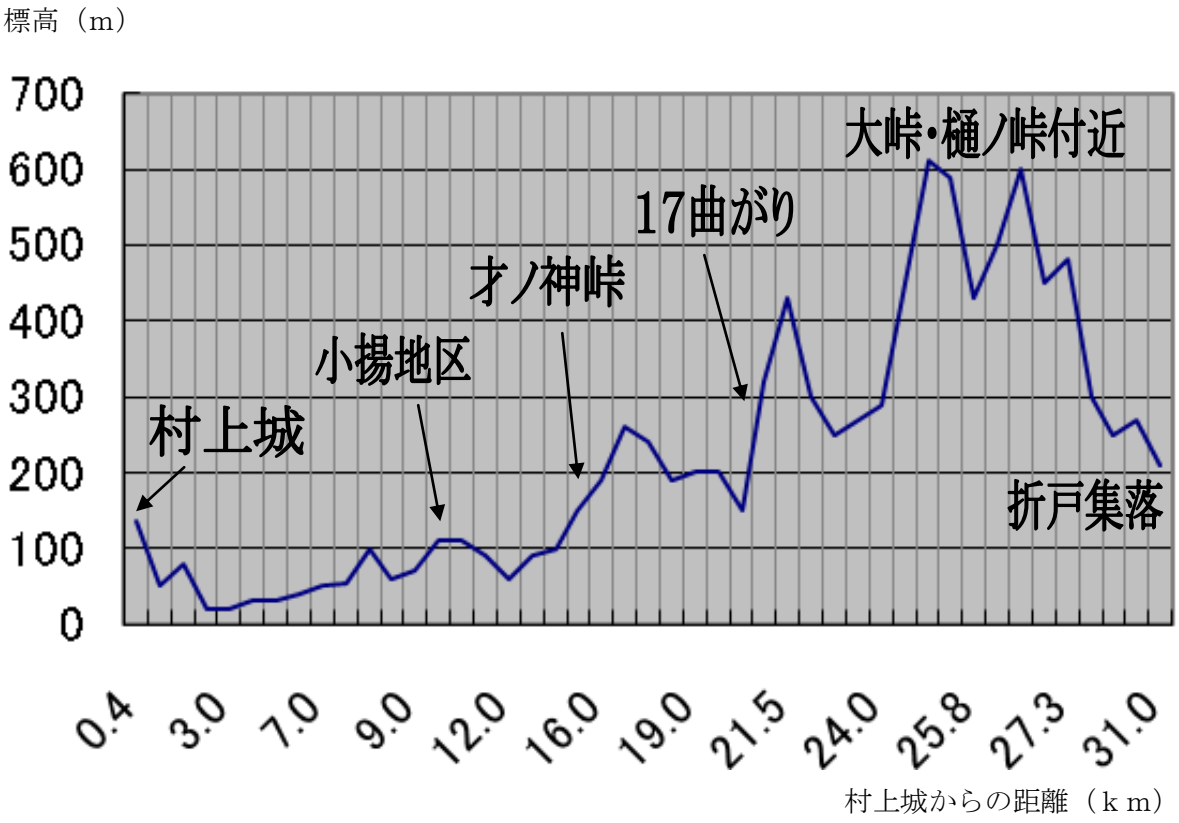
これで算出した各区間の値を足す。

		ＡＢ間	ＢＣ間	ＣＤ間	ＤＥ間	ＥＦ間	ＦＧ間	ＧＨ間	ＨＩ間
標高差									
地図上の距離									
実際の距離									

この表を元に用紙にグラフ化する。

今回の作成にあたり使用した地図は国土地理院発行の（２５０００分の１）です。昔は国家の威信をかけて日本全土の地図作り事業をしていた事を聞き驚きました。この地図４３４２枚に３次元の日本全土が描かれていることになり、これを解読できれば国土全体の情報が得られることを知りとても感動しました。人間の努力というものは形になると想像を越える気がしました。

柳生戸街道（塩の道）高度差表



地図には所々しか登山道がないため、「大峠を北に見る、烏帽子山を南に見る。荒川や綱木川に沿って」などという言葉だけの歴史書と絵図を参考に抜けているルートを探しました。なるべくアップダウンのないように山の谷の部分を縫うように道が開かれていました。しかしどうしても迂廻路が見つからない場合にでも、極力高い山に登ることのないように道が造られていたような感じを受けました。また、この辺りは山が深く急な場所が多いにも関わらず「助け」や「問屋」があったとされる場所は、落石や雪崩がありそうな急坂は避けられ、辺りが広くて平坦な場所に設置されていたことがわかりました。

絵図を手掛かりに地図からルートを探し、協力して高度差表をつくりました。

（５）かるた制作

１　制作にあたり

今回の学習を生かして、今私たちが伝承という意味で何かできないかと考え、子どもたちから大人まで興味をもってもらえるカルタをつくることにしました。「読み札をきいて、絵札をみる」そんな形で言い伝えを知ってもらう事ができればとの思いで作成しました。

社会科地域素材の教材化を目的として１９９６年から群馬大学教育学部の授業の中で「【群馬の】郷土かるたつくり」を行っているということをインターネットで知りかるたつくりのプロセスを参考にさせていただきました。

・各自で題材設定
・文献やインターネットで基礎調査
・現地聞き取り調査
・調査報告会
・札作り（絵札・読み札・解説文）
・完成（かるた大会）　「現代版「群馬の」郷土かるたつくり」より

これを私たちなりにアレンジしてみました

i　言い伝えの採取。
ii　読み札を考える。
　子どもにも扱えるように次の約束事を決めました。
　・リズミカルに言える様に５・７・５調でつくる
　・幼稚園児にも理解できる文を構成し、漢字にふりがなをふる。
　・小国らしさを入れる
iii　絵札を考える
　・絵札は（生活・祭事・動物）などに色分けする。
iv　下絵を描く。
v　下絵をパソコンに読み取り、線を描く。
vi　拡大印刷し、色を塗る。
vii　厚紙に張り、切り取る。
ix　読み札をつくる。

２　かるたを作る

ｉ　言い伝えの採取

昔物語だけでは数が少ないという理由から、言い伝えカルタ（生活・自然・動物）を制作することにしました。日常生活の作法に詳しい方を探しお話しを伺うことにしました。

学校の先生もなされていた海老名美恵子さんのお宅に伺い聞き書きを行いました。ご近所にお住まいの栗田文枝さんと塚原かるさんにもご一緒していただきお話を伺いました。始めは考えていてもなかなか出てこなかったのですが、世間話をきっかけに「そういえば・・」などと事柄が次々と出てきました。言い伝えとは、生活に浸透し過ぎているためなのか、なかなか普段は見えない存在である事に気がつきました。

今回お聞きした方々は家での仕事が多い女性の方だったためか、あらかじめ考えていった、観天望気や雪形に関する話が少なかったのは残念でした。天気に左右される仕事に従事されている方にもお話を伺わなければならなかったことが反省として残りました。

ii　読み札を考える。

お聞きした言い伝えを元に読み札を考えました。

	採取した生活の言い伝え（上段） 考えた読み札　　（下段）
あ	夜、爪を切る時は「たかのつめ」を３回言わないと不幸が訪れる。 【合言葉　夜のつめ切り　たかのつめ】
い	朝の蜘蛛は逃がしてよいが、夜の蜘蛛は成敗する。 【いい予感　朝蜘蛛逃がして　ラッキーディ】
う	上の歯が抜けたら家の（縁の）下に投げる。 【上の歯が　抜けたら下に　投げましょう】
え	カラスの羽を見たら「えんがちょう」を３回すると幸せが訪れる。 【えんがちょう　カラスの羽を　見たらする】
お	新しい靴は葬式の時に履き下ろす。 【お葬式　靴の新品　履いていい】
か	からすが夜鳴くのは不吉である。 【カラスらの　夜鳴きは不吉だ　注意せよ】
き	集合時の写真撮影などの際、真ん中に入る人は短命になる。 【気をつけろ　写真の真ん中　あぶないよ】
く	夜に黒猫を見ると不吉なことが起こる。 【黒ねこだ　縁起が悪いぞ　すぐ逃げろ】
け	椿はお見舞いに持っていってはいけない。（花（首）がとれる） 【決してね　お見舞いに椿は　持ってかない】
こ	ごはんを残すと（食べ物を粗末にすると）目が見えなくなる。 【ごはんをね　残すと天罰　目が見えない】
さ	アジサイやあやめが咲くと梅雨に入る。 【咲いている　アジサイ・あやめは　梅雨サイン】
し	新聞や紙を踏むと足に怪我をする。 【新聞を　足でふむと　ケガするぞ】
す	ねぎを食べると頭が良くなる。 【スーとね　頭が冴える　ねぎ食べよ】
せ	カレンダーを踏んではいけない。 【ぜったいに　踏んではいけない　カレンダー】
そ	葬式の家の前を通る時は、親指を隠さないと親不孝になる 【葬式に　親指隠さず　親不孝】
た	お墓で団子を食べると風邪をひかない。 【団子をね　お墓で食べると　風邪ひかない】
ち	朝茶は２杯飲む。 【茶を飲むは　朝にかぎり　お代わりを】
つ	つばめが低空飛行をすると雨が降る。 【ツバメがね　低く飛ぶと　雨が降る】
て	災難よけに梅干しを食べる。 【出かけるの？　災難よけに　うめ食べろ】
と	鳥の羽根を見たら「３回まわってごめんなさい」をする。 【鳥の羽根　見たらみまわり（３回り）ごめんなさい】
な	南天は縁起がいい。 【南天は　なんだかとても　縁起がいい】
に	午後から新しい靴を履く際には、靴を鍋の底に擦りつけてから履く。 【ニューシューズ　アフタータイムは　鍋すりよ】
ぬ	下の歯が抜けたら屋根の上に投げる。 【抜けちゃった　下の歯だったら　屋根の上】
ね	猫が耳をこすると天気がいい。 【ねこ（猫たち）がね　耳をこすると　晴れちゃうぞ】

の	土曜日は土いじり（農作業）してはダメ。
	【農作業　土曜日しては　いけません】
は	ハチに似た虫が出ると雪が降り始める。
	【ハチに似た　虫が出ると　雪が降る】
ひ	冷たい水にお湯を入れてはいけない。
	【冷や水に　熱湯入れちゃ　ダメダメよ】
ふ	怪我をした所が痛くなると次の日雨が降る。
	【古傷が　悲鳴をあげたら　雨前兆】
へ	へんくさ（カメムシ）が多い年は雪が多く降る。
	【へんくさが　多い年は　雪多い】
ほ	蛇の夢を見るとお金が集まる。
	【本当に？　夢に蛇出る　お金持ち】
ま	朝の虹を見ると雨が降る。
	【マジですか？　朝虹見ると　雨が降る】
み	ミミズの皮は解熱作用がある。
	【ミミズスキン　煎じて飲むと　熱下がる】
む	飯豊山の雪形が牛の形になると種を蒔く時期。
	【昔から　飯豊山見て　種を蒔く】
め	夜爪を切ると、親の死に目にあえない。　（夜爪→世詰め→短命）
	【目が点だ　夜の爪切り　親不孝】
も	妊婦の腹がとがっていると男の子。妊婦の腹がまるまっていると女の子。
	【盛り上がり　おなかの形で　男女別】
や	カラスがしんみり鳴くと人が亡くなる。
	【やな予感　変な鳴き方　人が逝く】
ゆ	雪が少ないと山菜があまり取れない。
	【雪少ない　大好きな山菜　取れないよ】
よ	夜、口笛をふくとドロボーと蛇が出る。
	【夜笛でね　ドロボーとへびを　プレゼント】
ら	吾妻山の雷は雨を持たない。
	【雷雲は　雷落とすが　雨降らず】
り	妊婦の顔が険しいと男の子。
	【凛々し顔　たぶん赤ちゃん　男の子】
る	女の人が（トイレを）掃除すると綺麗な女の子が生まれる。
	【ルームケア　産むと綺麗な　女の子】
れ	猫が顔をこすると雨が降る。
	【歴然だ　猫の洗顔　雨降らす】
ろ	幼児にミルクと果物（ジュース）を一緒に飲ませてはいけない。
	【論外だ　幼児にジュースは　飲ますのは】
わ	障子戸や畳などの仕切りは踏んではいけない。
	【わーダメダメ　畳の仕切りは　踏んじゃだめ】
を	葬式の時、朝茶は一杯だけ飲む。
	【輪を乱す？　葬式の際は　茶は一杯】
ん	仏壇に生臭いものはあげない。
	【んっ？臭い　生もの仏壇　にはあげない】

iii　絵札を考える

読み札からイメージを掴み一枚の絵で表現する為には
どんな構図がよいか、一目でわかるように工夫しました。

iv　下絵を描く。

鉛筆ではじめに下絵（ラフ）を描きました。（写真上）
アニメが得意ということで班長の船山澪が担当しました。

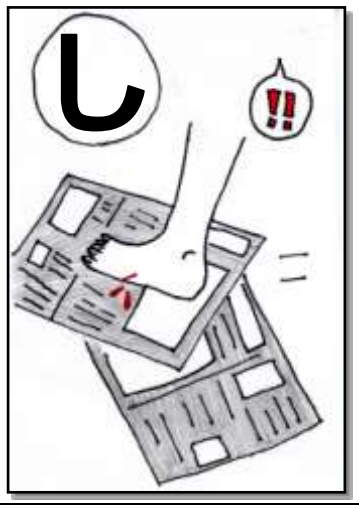
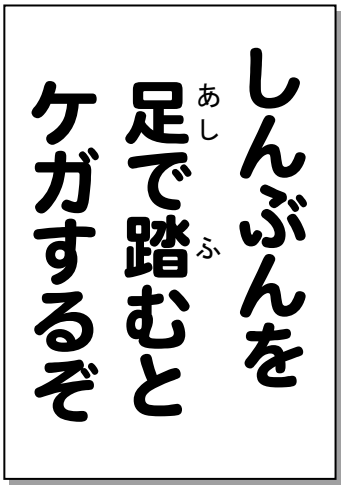
v　下絵をパソコンに読み取り、線を描く。（写真下）

下絵をスキャナーで取り込み、下絵の線をトレースし、ベクトル線にします。（ベクトル線にすることで拡大しても荒れないそうです）

vi　拡大印刷し、色を塗る。

彩色はパソコンでも出来るそうですが、手作り感を出すために、印刷をしてからその紙に直接、色を塗っていくことにしました。

言い伝えの項目をわかりやすくする為に、絵札のふちは（生活　黄色）・（祭事　緑）・（動物　青）に色を分けてみました。

<table>
<tr><td> </td><td>  </td></tr>
<tr><td>下絵</td><td>色を塗った絵札</td></tr>
<tr><td> </td><td> 
</td></tr>
<tr><td>作業風景</td><td>読み札</td></tr>
</table>

vii　厚紙に張り、切り取る。

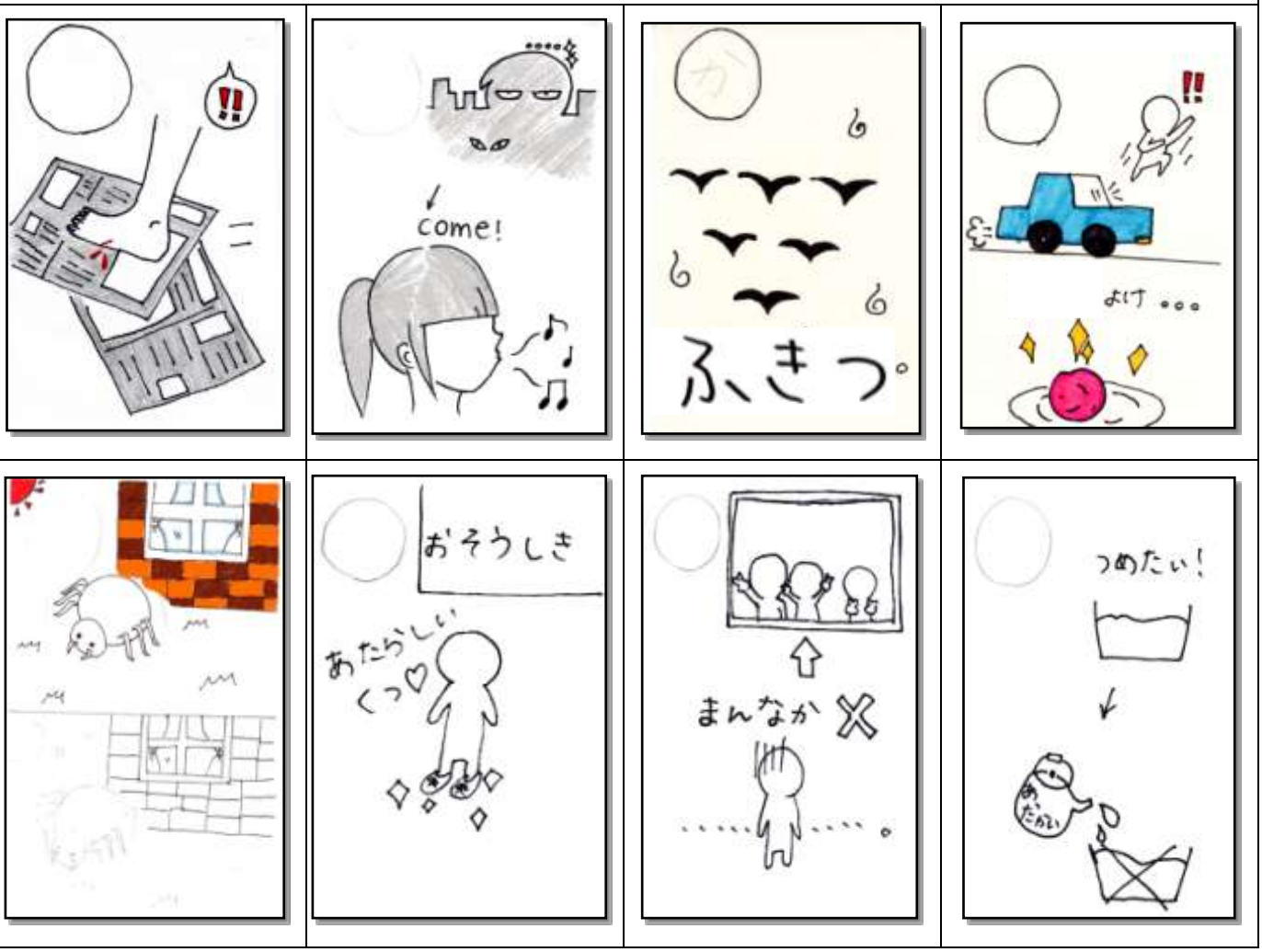
ダンボールにのりづけし、Ａ４サイズ（２１０ｍｍ×２９７ｍｍ）に切り取ります。

ix　読み札をつくる。

読みの文章を入力し、名刺サイズで印刷し完成です。

読み札作成の際、重複のない頭文字で言葉を組み立てる事は予想以上に難しい作業でした。また絵札も「～をすると～になる」といった言い伝えが多いため一枚の絵で表現するにはどうしたらいいだろうという話し合いがほとんどで想像力を掻き立てられる作業の連続でした。その事も影響し、思いのほか作業に時間がかかり、全て完成までには至りませんでした。完成した際には地元の幼稚園児に実際に遊んでもらおうとプレゼントしたいと考えています。

絵札（９月１２日現在）



（５）調査を終えて

当時小国町は羽前小国郷と呼ばれ集落は細分化されていたことなど、地元に生まれ今まで生活してきたにもかかわらず、知らなかったことが多いことに驚きました。さらに昔物語から調べていく上で、小国の風習や習慣などの発見もあり、知る楽しみを感じながら学習を進めることができました。屋号や地名など、その土地で特化した部分をモチーフに自然や生活に関しての名が多くつけられていました。北部地区に限り地名のルーツを調べましたが、生活環境に沿ったその名前のつけ方は特に興味を持った部分です。しかしどれも断定されたものではなく「知らない内にそういわれていた。」などというものが多数であり、ルーツをたどるということは、回数、期間ともに長期にわたる取材が必要な事を知りました。ルーツに関してはもっと多くの発見ができるように、お聞きできる方がご健在のうちに調べ続けていきたいと思いました。

聞き書きで良かった点は、昨年の反省をいかし、お聞きする人を探す際にその地区の家の屋号を参考にした事です。それによってスムーズに取材を進めることができました。しかしその反面反省点も出ました。それはＩＣレコーダーを使い一言も漏らさず記録するまでは良かったのですが文字に起こす作業で時間がかかり過ぎその後の計画が遅れていった事です。それはしっかりとした役割分担をしていなかったという事が原因でした。

街道については、藩を越えての経済・文化の大動脈であったこともあり、小国側から探るだけでは正確なものとはいえないと教えていただき、それぞれ村上・長井など地元の図書館に出向き史料を参考にできたことは良かったと思いました。ただ、舟運に関して言えば、酒田からの最上川舟運や、米沢藩（置賜）領内などの舟運の取り扱いに関してなどを調べる際も参考となる文献や歴史書が膨大にあり、進むにつれて次第にテーマからかけ離れてしまう事も多々ありました。始めは数名でチェックしていたのですが、後半は時間の関係もあり個人で担当することが多く確認作業が疎かになり、気がつけば違う方向に進み過ぎていたというものです。レポートのまとめ方の難しさを改めて感じました。

塩の道や西山街道からはその時代の人々の生活に密着していた事を学びました。人々に必要とされ、望まれていたからこそ、このような大事業も協力を得られ成し遂げられたと感じました。見学してきた塩の道の入り口は、我々には単なる田んぼ道にしか見えなかったのですが、当時街道開拓にたずさわった多くの方々の尽力があり、そんな方々の子孫である私たちが今こうしてこの土地で生活をしているということを考えると、とても不思議な感じがしました。私たちは平成時代しか生きていません。授業で習ってはいてもそんな歴史事項は実感がわきませんでした。しかし今回の学習で明治・大正、そして飛躍的に経済が発展したといわれる昭和の背景を知ることができ、さらにその時代の歴史録はこの小国にもしっかりと刻まれていることが分かったことで、地元への愛着が一層深くなりました。日本史からみれば小さな歴史かもしれませんが私たちの住む、この自然豊かな小国町の古くて新しい発見ができて満足しています。これから先も誇りを持って「好きな故郷」と呼べる魅力あふれる小国町になるように私達も学習を重ね、新しい歴史を創り、そして昔の歴史を守っていかなければならないと強く思いました。

参考

・小国町の昔物語について　平成 21 年度小国高校リポート
・庶民信仰と伝承芸能　菊地和博　著
・やまがた民俗文化伝承誌　菊地和博　著
・最上川と羽州浜街道　菊地和博　共著
・とよゐのむかしかたり　おぐに鼓友塾・佐藤とよゐ共著
・年中行事読本　金儀右衛門　著
・800 年来の霊湯　いでの湯　北野猛　著
・みちのくの民話　東北農山漁村文化協会編集
・おきにわ　ふるさと学習資料編集委員会編集
・雪国の語部置賜地方の民俗誌　武田正　著
・観る照らす山形　(財)山形県生涯学習文化財団編集
・イザベラバード極東の旅 1・2　金坂清則編訳
・置賜の庶民生活　1・2　置賜民俗学会編
・小国の民俗風土記　奥村幸雄　著
・山形県史 6 巻
・長井市史 2・3 巻
・いにしえの道“塩の道”を尋ねて　六ヶ字地区塩の道保存協議会
・歳々風雨物直咄集　新野伊三太著
・置賜の戊辰戦争　歴史保存会編集
・山形県の交通史　長井政太郎著
・最上川舟運と山形文化　東北出版企画編集
・長井の宮舟場　長井歴史保存会編集
・舟場というところ　舟場公民館編集
・山楽百花　小荒井実著
・塩の道　宮本常一著
・平野郷土史　平野郷土編集委員編集
・浜の観天望気　酒田海上保安部編集
・「現代版「群馬の」郷土かるたつくり」より
http://www14.plala.or.jp/hpmsmiki/modem/index.htm

今回レポートを作成するにあたって参考とさせていただいた本を執筆された方々始め

このような地元の歴史を探求する機会を与えていただいた皆様方

調査にご協力をいただいた関係者の皆様　大変ありがとうございました。